

相克相生と深奥幽玄——囲碁・棋史の情理と妙趣（2）

夏 剛 ・ 夏 冰

新布石の衝撃と囲碁・人工知能の「^{ウイン・ウイン}双 贏」

安土桃山時代（1568～1600）頃の日本に於ける互先置石制から自由着手制への変革、17世紀後半の大局観・合理性重視の道策理念、19世紀半ばの^{スピード}速度・効率追求の「秀策流」先番布石法に次いで、1933年の木谷實・呉清源に由る新布石革命は囲碁史上の新時代の到来を告げた。日本棋院秋季大手合第1・2回戦（10.4～5・10～11）で両五段が敢行した奇抜な布石は、中央進出の志向と奔放不羈の着想で囲碁の活性化を促し史上第2の黄金期の「初手」に当る。直後の16日に始まった秀哉対呉の名人勝負碁は史上初の社会現象化した^{ブーム}囲碁熱を巻き起し、主催紙『読売新聞』はこの1局の連載で発行部数を60万から一挙に80万に伸ばした。漢字に読み仮名を振った画期的な大衆紙として1874年に創刊した『読売』は、関東大震災（1923.9.1）後の経営難で正力松太郎（1885～1969）に買収され、^か彼の内務官僚出身の経営者・政治家の囲碁棋戦企画に由って^{きんきん}僅々5万部の三流紙から脱皮し、長年主催した旧名人戦（61～75）を上回る単年度優勝賞金史上最高の棋聖戦の第1期終了の77年2月に、『朝日新聞』を抜いて日本1と成り、ソ連邦解体（91）後ソ連共産党機関紙『プラウダ』（中国語＝『真理報』）を超えて世界最多に成った。呉清源は大山康晴との対談「棋道——日本の文化として」（『樵 人間讃歌第21号』[樵出版社、77]、『大山康晴全集Ⅲ 記録への挑戦 昭和47年－平成3年』[毎日コミュニケーションズ、91]所収）の中で、秀哉に打った三々・星・天元の中の起手は坊門の鬼門と言われたので世間を騒がせ、新聞の盛り上げで碁界も盛んになり自分の新布石の思い付きは良い結果を得たと振り返る。棋譜・解説付きの新聞棋戦報道の「爆売り」は囲碁王国の黄金期の輝きを現す事象であり、日本1・世界1を数十年保って来た新聞の中興期の人気・金脈の源に囲碁が大いに有ったのも興味深い。

2013年2月に中国の若き「力碁の雄」時越（1991～ ）が第17回LG杯で優勝し、これに由り五段から九段に飛び級昇進し5月の戦績累積^{ポイント}得点も初めて中国1位に達した。10月には第10回^{しょう}倡棋杯中国囲碁職業錦標賽（^{プロ}專業選手権戦）で国内の「重量級冠軍頭銜」（主要棋戦

選手権の^{ビッグ・タイトル}大冠)の初獲得を果し、6月から下落していた序列(2位→6位→3位→3位)はNo.1に戻り、以後2年弱の間に多少の後退(11月と翌年3・4月は2位)を除いて維持した。内外制覇の新王者の出現は氏名と「十月」の同音・同声調(shíyuè)に因んで「10月革命」と称されたが、80年前の呉・木谷の「10月革命」は2015年8月を最後にして首位を失っている彼の比ではなく、**棋史に於ける意義は世界史の中の^{ロシア}露西亞革命**(1917.11.7[ユリウス暦10.25])に下らない。両旗手は名人勝負碁の途中の年末に長野県地獄谷の温泉宿「後楽館」で布陣法に就いて議論し、翌年1月に『棋道』(日本棋院機関誌、月刊)編集長安永一(1901~94、当時の四段[本因坊門下時代の取得時期は未詳]が最終段位で後に^{アマチュア}非專業に転身、76年^{アマ}非專業「四天王」と共に棋院から^{アマ}非專業初の7段が贈られた)と共著の『圍棋革命 新布石法——三々・星・天元の運用』(平凡社)を世に問うた。**新理論誕生で満天下騒然となる中で忽ち10万部も売れた流行は棋史上の大記録を作り、日本の囲碁の繁盛の背景には棋書・観戦記を含む活字文化の高度な発達が見られる。**10月革命の年に王朝の専制政治が崩壊した帝政露西亞に引っ掛けて言えば、日本が日露戦争(1904~05)で欧亚に跨る老大国に勝った要因に兵隊の識字率の高さも有るが、**20世紀の中国の囲碁の水準も識字率の前半の低迷→後半の急伸と連動した様に見える。**10月革命100周年の際に中国の報道機関では毛沢東時代の様な礼賛は抑えられており、逆に2日後の報道集約提供大手「今日頭条」(頭条[略称のToutiao]=^{トップ・ニュース}主要報道)が配信した記事は、日本国民の^{モラル}倫理道德の高さの背景には高い識字率を保つ継続的な取組が有ると称える。江戸時代以来の数百年に亘って日本の識字率は世界の^{トップ・クラス}上位に在り続けて来たとも書かれているが、**日本の江戸~昭和の囲碁王国の地位も盤上遊戯の実力と知的水準の密接な相関を示唆する。**

新布石誕生の次に囲碁の在り方を変えた歴史的な進化も「10月革命」の名称に相応しく、2015年10月5~9日に^{ロンドン}倫敦で行った極秘棋戦が人工智能制覇の新紀元の^{うぶごえ}産声と為った。^{グーグル}Google社(米国の情報技術超大手)傘下の^{ディープ・マインド}DeepMind社(英国の人工智能開発新興企業)が制作した^{ソフト・ウェア}電腦運用指令体系^{アルファ・ゴ}AlphaGo(芸術作品と見做す故に欧文は斜体表示)が、^{ヨーロッパ}欧州囲碁王者3連覇中の^{チャンピオン}樊麾(1981~、98年中国[出身国]棋院二段、^{フランス}仏蘭西籍)との公式対戦を5-0で制し、^{コンピュータ}電腦が対等の対局条件(互先)で^{プロ}專業棋士に勝つ史上初の快挙を遂げた。奇しくも直後の10日に別の^{高難度盤上遊技}の^{プロ}專業棋士に対する人工智能の事実上の勝利宣言が為され、清水市代女流王将・王位(1969~、^{クイーン}女王4冠達成に由り2000年女流六段[女性将棋棋士の最高段位])を平手(双方が互角の手合)で負かした(10.10.11)後の実績を踏まえて、日本情報処理学会は^{コンピュータしょうぎプロジェクト}電腦将棋工程の終了を表明し^{もはや}最早相手にしない様な姿勢を示した。翌年1月27日に英国の総合学術誌『自然』電子版で論文・棋譜付きの「^{Alphago}アルファ碁」戦勝が公表され、満天下の驚愕を増幅させる様に世界最強級の^{イセドル}李世乭(1983~、世界戦2年連続優勝に由り2003年韓国棋院七段→九段)への^{チャレンジ・マッチ}挑戦手合が予告された。3月9・10・12・13・15日

に首爾で交される激戦の電脳網中継は延べ2.8億人の視聴を集め、世界戦優勝数（14回）史上2位の覇者に対する4勝1敗で人智の最後の砦が決定的に攻略され、人工知能史上の第3次ブームの中で世界の「人工知能大活躍元年」（造語）の幕が切って落された。

人工知能の破壊的な威力と建設的な創造力の超絶はこの驚天動地の突破で確証を獲得し、試金石の囲碁も科学技術の発展に貢献した究極の頭脳競技の性質を世人に再認識させた。82年前の「10月革命」では呉清源優勝1等・木谷實同2等の結果が新布石の成功を印象付け、若手棋士は奔放な趣向を過激に試行する方向へ走り碁界長老や一般人まで新潮に追随したが、今回も異次元の新機軸に衝撃を覚えた世界中の高手は早速 AlphaGo の手法を取り入れた。囲碁と人工知能の相克相生・共存共栄の「双赢」（共に勝つ。英語の win-win の中国語訳）は、中国の囲碁用語の「双活」の「双方共に活きる形」の共生の意味合いと妙に通じ合う（対応する日本語の「関」は「塞く」の連用形から来た言葉で、『広辞苑』の「⑥〔普通、片仮名で、“持”とも書く〕囲碁で、互いに攻め囲まれた一群の石が、どちらも眼^め二つを持たないのに、双方手出しできないまま、互いに生きていてる形」に当る。両言語の間の枚挙に暇が無い交錯・倒錯・混線・混合・複合・派生等の例として、中国語の「関」は囲碁で日本語の「飛/跳び」を指し〔一間飛び＝「単関」又は「一路跳」〕、「〔小/大〕飛」は〔小/大〕桂馬を表す）。史上最著名局の1手目の三々は呉清源の燦爛たる栄光に由って坂田栄男等も愛用したが、呉逝去の年に開発し始めた AlphaGo の早々の三々入りで再評価される巡り合せは興味深い。

日本の地味な凄さと中国人の鮮明な権利意識

2016年から人工知能は報道媒体等の言説空間を賑わさぬ日が無いほど世間の一部を為し、その高性能に由る業務代替の波が押し寄せ多くの人間・職種が失業・淘汰の危機に曝されるが、日本では非創造型の裏方の仕事と捉えられ勝ちの校閲は奇妙にも突如脚光を浴び始めた。AlphaGo 対樊麾の初戦の1年後に登場した連続劇『地味にスゴイ！ 校閲ガール・河野悦子』（日本テレビ、全10話、2016.10.5～12.7放映、原作＝宮木あや子『校閲ガール』『校閲ガール ア・モード』『校閲ガール トルネード』[2014・15・16、KADOKAWA]、脚本＝中谷まゆみ）に由って、文章の正誤・適否を確める仕事の平凡にして重要である性質が広くビジュアルに認識された。同局の直前の連続劇『家売るオンナ』（全10話、7.13～9.14放映、脚本＝大石静）でも、「校閲の鬼」の独身女性が誤字・脱字の無い引札に魅かれて住宅の購入に至った話がある。「爆売り」天才の主人公三軒屋万智は謹厳・地味な彼女の背中を推すべく勤め先に乗り込み、古代希臘の「イソップ寓話」（伝・前6世紀頃）の「蟻と蝨斯」の勤勉・儉約礼賛を引いて、「校閲の仕事が続けて10年、コツコツ貯金を作った草壁様は正に蟻です。校閲部の地道なお仕事も又蟻そのものではないでしょうか。真面目にコツコツ働く姿は勤勉な我々日本人の美德そのもの

のです。皆様のお蔭で日本語は未だ死なず、活字文化は守り育てられています。有り難い事です。書籍を愛する読者でさえ、校閲の方の存在を知る方は少ないでしょう。スポット・ライトの当る作家の裏に掛け替えの無い校閲部の仕事がある事を誰も知りません。感謝もしません。書籍の後書^{あとがき}で著者にお礼を言われる事も有りません。然^{しか}～し！皆様はそんな事は気にも掛けず、コツコツと作品の質を守り続けておられます。素晴らしいです。感動します。頭が下がります。今こそご自分の勤勉さを誇りに思う時です」と、仕事柄元々静まり返っていた大部屋で啞然として聞く数十人の社員に向って熱弁を振るった。同行の営業員^{マン}庭野聖司が「そうです。家を買きましょう！208号室を！」と更に一押しすると、彼女は「余計な事を言うな！馬鹿者！」とその言わば「思想性が低い」へば・野暮を叱り、「落ちた！」という確信で「ご清聴有り難うございます」と礼を述べ^{さっそう}颯爽として去って行く。人生最大の買物を型破りの妙手・奇手・鬼手で売り捲る豪腕は喝采を浴びる要素が多く、作品は日本に止まらず放送の其其1時間/1週間後に香港・比律賓^{フィリピン}・タイ^{タイ}・インドネシア・東埔寨^{カンボジア}/韓国・台湾・米国で放送された（英文題は「私の仕事は家を売る事です」という主役の台詞に因んだ *Your Home is My Business!* [御宅は私の商売^{ビジネス}です！]、中国語題は直訳の「売房子的女人」）が、主役の派手な凄さと共に内外で宣揚された脇役の地味な凄さも玩味に値する滋味^{じみ}である。

次期（仏蘭西語の ^{クール}cours に由来したこの放送業界の用語は連続番組の1区切りの単位を意味し、通常週1回で1四半期に納まる13回）の同枠（水曜夜10時）の新作の宣伝として、各々が黙然と校正刷^{ゲラ}に没頭し粛粛と点検を進める職場への突入勧誘の場面は効果的であるが、著者が校閲嬢^{ガール}の熱意・完璧さに感激し謝辞にその名を記すという次作の非現実的な設定と共に、自ら黒子に徹し完成品に痕跡を残さない日本の校閲者の「日陰」の在り方を浮彫にしている。日本の常識・良識が往往にして海外の非常識・非常態である事の1例と為る様に、中国の書籍では校閲者は可^よく「責任校対+氏名」の形で「版權頁」（奥付^{おくづけ}）に記載される。「奥付」は書物の末尾に付ける書名・著（作権）者・発行者・印刷者の氏名と発行日・価格等を記載した部分/頁を意味し、『日本国語大辞典』の語釈には「著者の検印紙を張り付け、または印刷する」とも有るが、「訂正増補新らしい言葉の字引（1919）〈服部嘉香・植原路郎〉追加」が初出と為るこの奥床^{おくゆか}しい和語に対して、明治10年代に図書の奥付に入る「版權免除」の文言で一般化した和製漢語「版權」を用いる「版權頁」は、中国人の権利意識と自己主張の強さを表し位置も洋書並みに表紙の裏面辺りに在るのが多い。其処に編集者・校閲者や装訂者・題名（題字）者等の氏名及び発行部数等まで出るのは、「人過留名、雁過留声」（人は立ち去ると名^なを留め、雁^{がん}は飛び去ると声^{こゑ}を留める）欲求にも基づく。中国では「名」の文化」に由って古来「青史留名」（青史に名を留める）願望が異様に強く、例えば唐の詩人劉希夷（651～79）の名句「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」（年年歳歳花は相似^{あい に}たり、歳歳年年人は同じからず）を巡って、自分の作品にして欲しいという母方の親戚宋之間（656?～712 又は 713）の所望を断った為、

宮廷詩人の名声にも満足しない貪婪な宋の怒りを買ってその下僕への指図で撲殺された。『広辞苑』第7版でも50年前に逝った新村出を唯一の編者として表紙に明記しているが、今後も続けて行くこの追悼記念の方法は中国では現役者の名利と衝突するから有り得ない。『現代漢語詞典』第7版の扉の裏に6回の受賞歴（最高が1994年第1回国家図書賞）が掲げられ、次の頁に言語学者呂叔湘（旧名湘，1904～98）・丁声樹の往昔の指導的な役割が記され、本辞書の編纂に卓越した貢献をされた両先哲に崇高な敬意を表すという謝辞が綴ってあるが、次の3頁には歴代の編纂・審査・修訂の責任者・担当者の氏名が綿綿と列記され、資料担当や計算機処理の「単純労働者」も仕事に貴賤無しの社会通念を体現して入っている。

又『大地の子』の囲碁絡みの話を挙げるなら鄧小平（本名鄧希賢，1904～97）が思い及び、彼の1980年代の最高実力者は聶衛平の「牌友」（西洋骨牌の「橋牌」の遊び仲間）である（作中の「鄧平化」は執筆時の中国日本友好協会会長孫平化〔1917～97，86～97在任〕から思い付いたのか。同名の要人に党中央宣伝部部長等を歴任した張平化〔本名張楚材，1908～2001〕も居る）。両国比較の好例として毛毛著『我的父親鄧小平 「文革」歲月』（中央文獻出版社，2000）と、日本語版『わが父・鄧小平 「文革」歲月』（藤野彰・鎧屋一等訳，中央公論新社，03）を挙げよう。原著の表紙裏（中国語は表紙を表す「封面/封一」に因んだ「封二」〔＝日本語の「表2」〕）に、故人の三女（旧名蕭榕，現名鄧榕，1950～）の大きな多色写真入りの略歴が載っており、見返し（その頁及び次の遊び紙「中国語＝「空白頁」）に次ぐ扉（同＝「扉頁」）の裏の頁には、書名・著者名・出版社及び所在地域〔北京〕・刊行年月・国際標準書籍番号・検索鍵 詞等の基本情報に続いて、著者・責任編輯（編集者）・編務（編集実務）・装幀設計・責任校対の名前が出ており、下に出版社兼発行所の住所・郵便番号・販売用電話番号や販売書店の他に印刷装訂の会社名・住所が書いてある。更に寸法（850×1168mm）・字数（390千字）・「2000年6月第1版 2000年7月第三次印刷/印数〔印刷部数〕230000冊」，定価（40.00元〔当時≒520円〕）・特典（「光盤〔CD-ROM〕」1枚附き）の後に、薄い小さな字で「本社図書如存在印装質量問題，請与本社聯係調換」（当社の図書に若し印刷・装訂の品質の問題があれば，当社に連絡し取り換えの要請を下さい）と記され，続いて最後に太字（中国語＝「黒体字」）で「版權所有 違者必究」（版權を所有し，違反した者に対して必ず追及する）という文言を掲げている。海賊（同＝「海盜」）版横行の国情を映す警告と共に權利主張の強さを思わせる記載として，前出の「装幀設計/敬人設計工作室 呂敬人+徳浩」（主要・副次の違いを示す活字の大きさの違いは原文の儘）の他，鄧小平語録と定価が印刷された裏表紙（同＝「封底」）の前の頁（同＝「封三」〔裏表紙裏を言う日本語の「表3」に対応〕）の文字も，「責任編輯：劉敏/装幀設計/敬人設計工作室 呂敬人+李徳浩」と為る。対して日本語版（2巻）の上巻の表紙に書名・著者・訳者代表名，見返しの右（縦組につき原著と反対側）の頁に著者の写真・略歴が掲載され，扉に表紙の情報+出版社名，その裏に「装幀・装画 鈴

木正道」と記してある。文字通り本文の後に在る奥付には著者略歴が再掲され、下に表紙と同じ情報及び「2002年5月10日初版印刷 2002年5月20日初版発行」「発行者 中村仁」「発行所 中央公論新社」（以下、住所・電話〔販売／編集〕・URL・振替）・印刷 凸版印刷」、更に「©2002 CHUOKORON-SHINSHA, LNC./MaoMao, Akira Fujino & Hajime Abumiya」の著作権表示が有り、続く国際標準書籍番号等の下に小さい文字で「定価はカバーに表示しております。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部にお送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします」と結んでいる。後者の^{コピー・ライト}© 使用や^{U n i f o r m R e s o u r c e L o c a t o r} 電脳網上特定の情報蓄積体系の所在表示は当時の国際化の度合の高さを現し、編集部電話の開示や「小社」の謙称、送料負担の件は^{くだり}日本的な「小さな親切」の感が有り、目立つ処に装幀者の名を明記したのは中国と同じ知的創造及び所有権への尊重の証である。日本では有り得ない編集・実務担当・校閲者の^{おくづけ}「版權頁」での登場は個我本位の所産と思われ、同じく日本流に無い字数・印刷（累積）部数の明記は中国的な物量主義の発露と捉え得る。

囲碁の失着と似た「校書掃塵」の誤植の示唆

中国囲棋協会・中国囲棋協会培訓（育成）^{センター}中心指定教材『中国囲棋史』（陳祖徳主編、^{さい}蔡中民・趙之雲・鄭懷徳・邵福棠・汪凱・陳克忠・劉善承・楊光輝著、中国統計出版社、1997）の「序」の前の頁に、「囲棋教材編委會名單」（^{センター} 囲碁教材編集委員会名簿）が載っており、「主編・題名：陳祖徳 中国棋院院長 中国囲棋協会主席 / 副主編・序：王汝南 中国棋院副院長 中国囲棋協会培訓中心理事長 / 編委會主任：華以剛 中国囲棋協会秘書長 中国囲棋協会培訓中心主任 / 編委會副主任：華榮 中国囲棋協会培訓中心副主任 / 執行主編：呉玉林 国家少年囲棋隊主教练」の次に、「編委（按姓氏筆劃為序）」（編集委員〔姓の画数順〕）の12人（〔画数順が直観できる様に此处で簡体字の儘〕左兴・刘善承・许婉云・朱宝训・陈克忠・邱百瑞・邵福棠・汪凱・楊光輝・鄭懷徳・趙之雲・蔡中民）が出ており、下に在る最後の記載は校正担当の「責任校対：陳^{しん}晨」である（太字は原文）。編集主幹の陳（1944～2012）は元中国王者（65～74）として初代九段3人中序列2位、副主幹の王（1946～）・華（1949～）は2人しか居ない初代八段（以後昇進無し）、執行主幹の呉（1946～，88年六段）は国家少年^{チーム}隊 総監督として棋士育成の実績が多い。^{そうそう} 錚錚たる顔触れの後の「責任校対」は校正（「対」＝対照，合致）に責任を持つ担当者で、大きな活字で氏名が明記された事は言語面の品質担保の表示として受け止められるが、中国の棋書でも校書掃塵の例が^は掃いて捨てるほど有る状況を示す「^{ほんミス}低級錯誤」が目余る。中日棋戦の部分だけでも小林光一（1952～，78年九段）十段（84～86，99～2000計5期）を「小林光^{ママ}十一段」と間違え、片岡聡（1958～，88年九段）の「岡」を2回も「崗」と書き（中国で知名度の高い岡村寧次〔1884～1966，支那派遣軍総司令官等歴任，陸軍大将〕の様
284（870）

に、「崗」ならぬ「岡」が日本人の氏名用字である事は常識のはず）、「中日囲棋擂台賽（^{勝ちぬき}勝抜戦）」（日本側の名称＝「日中スーパー囲碁」）第1回（1984.10.6～85.10.20）主将決戦の聶衛平の対藤沢秀行の $1\frac{3}{4}$ 子（3目半）勝ちを $1\frac{3}{4}$ 子（1目半）勝ちと1子（2目）減らした。教科書なのに紙の質と同じく粗末な誤りの多発は「無知」と誹られても仕方が無いが、**図書の量・質とも世界的な高水準を誇る日本でも棋書には失着めく過誤が散見される。**

中山典之は80年前の新布石誕生を語る『昭和囲碁風雲録』の「ベストセラー」の1節で、棋書を買うに当って著者その人を信用するだけでは充分ではなく、著者が全く関与していない悪質な物さえ有るから寧ろ大いに危険だと警告し、もっと^{ライター}執筆者に注目して欲しいという^{ライター}著述家の我田引水も感じさせる助言を付け加えた。「複雑きわまる棋士の思想を、特に、まだ海のものと山のものとも判らず、プロ棋士でさえ試行錯誤の最中であった新布石を、分りやすくアマ諸兄に説明するなどということは不可能に近い。それを何とかやってのけたのが安永一・四段だった」と語っている。「安永一・四段」は第29章第2節「好敵手物語」中の「小林光一・九段」「橋本昌二・九段」と同じく、段位が1桁の数に限る（「十段」は選手権・棋戦名）事を知らぬ読者への配慮も有ろうが、その細かい芸で顕彰された安永の著述を検証すると大雑把な不備が^{おぼけ}幽霊の如く飛び出て来る。聶衛平は『我が囲碁の道』第19章「中日棋戦」で対高川格の勝利（1975.10.28）を回顧し、後に日本で「聶旋風を巻き起した歴史的な1局」と称されたと書いている。安永著『中国の碁』（時事通信社、1977）の「Ⅳ 日中交流」第4節「聶衛平旋風おこす」が出処と思われるが、この力作の目次中の「Ⅲ 古代からの碁風の変遷」「6 現代」第3節は不思議に正・誤を交えて、「第一人者、聶衛兵の研究／強腕同士のわたり合い—陳祖徳・聶衛平5譜・9図／さすが中国選手権者—聶衛兵・王汝南4譜・9図」と為っている。「5 清代」第3・4節「凄まじい力闘—梁魏今・苑西屏3譜・2図」「清代の名人の碁—周東彦・黃月天2譜」も、国手級の苑西屏（1709～69）・周東侯（生歿年未詳）の姓・名を珍妙な形で間違えている。「范」は同節の本文では正しいのに「5 清代」第1節「顕著な技術的發展」では「茫」に作り、2種類も有る誤植の中でこの字は「范」に近いものの姓に用いないので荒唐無稽である。「荒唐」の字面と重なる「2 唐代」の粗（^{あら}荒）の1つは第4節「名手王積^{ママ}新の妙手」（本文・目次）で、名高い「囲碁十訣」の作者（生歿年不詳）の柴刈りの故の「積薪」も知らないのかと疑わせる。Ⅲの第2節「日中囲碁交流の実現」の中の1962年全国選手権大会（第5回）の上位6人中、優勝の^{てき}過惕生（1907～89）は163頁の最後の行では正しく刷ってあるのに、次の頁の1行目に在る次の文では突然変異の様に「過惕生」とされ、4位の「黄交淵」も董文淵（1918～96）の誤植である。「Ⅳ 日中交流」第1節「昭和三十五年に実現」の中の1962年訪日団（第1回）の筆頭選手「劉捷懷^{ママ}」は、第2・3回全国個人戦（58・59）優勝の劉捷懷^{てい}（1897～1979）の名前を間違えた。北京在住の過は第1回全国個人戦（1957）でも優勝し上海在住の劉と「南劉北過」の双壁を為したが、64年の初代五段（最高位）4人で序列1・4位の過・劉と

も完全に正確な記載と為っていない。非職業^{アマ}4強の1人として別格の安永と同じ前年に初代7段と成った囲碁アマ名人菊池康郎(1929～)は、「安永先生が稀有の中国通であり、中国囲碁史研究の一人者であることはいうをまたない」、と著者の「はしがき」の前の「安永先生と中国の碁」の冒頭で絶賛しているだけに、日本の囲碁人も多少知っている棋史上の有名な人の人名の間違ひは沽券に関り始末が悪い。

それは執筆・制作の問題と共に国交正常化(1972)から間も無い頃の情報不足も考えられるが、陳祖徳と同年代の石井邦生(1941～ , 78年九段)の21世紀の著書にも誤記が複数有る。彼は『わが天才棋士・井山裕太』(集英社インターナショナル, 2009)第7章「わが弟子に託す夢」第2節「世界へ飛び出せ」の中で、愛弟子の国際棋戦の成績として先ず棋聖戦・名人戦総^リ当り入りした08年の訪中を挙げ、「井山は中野杯U20選手権に優勝したごほうびに、八名の中国遠征団のキャプテンに選ばれ、同じ世代の四人(陳耀燁^{ママ}、朴文堯^{ママ}、李哲^{ママ}、周睿容^{ママ})と戦った。若いけれど中国ランキングの十位以内に入る実力者だ。井山はこの四人に対して三勝一敗の好成績だった。中国囲碁協会の幹部は“中国ランキング一位の古力でもこのメンバーに三勝一敗は難しい”と語ったと聞いた。公式戦ではないものの、この中国遠征が大きな自信になったと思う」と記している。朴文堯(1988～ , LG杯優勝に由り2011年五段→九段)の「堯」は中国でも難読字であり、同音・同声調(yáo)で繁体字の一部を為す「堯」の簡体字「尧」と便宜的に表記される事も有るが、「山が高い」意の文語で「堯」(「伝説中の上古の帝王の名」「姓の1つ」の両義)と無関係である。李喆(1989～ , 07年六段、世界戦4強入り2回)の「喆」は「哲」(zhé)の異体字で、中国の一般人も「吉」(jí)と読み間違えたり「哲」と誤記したりする事が多いが、今専ら人名に用いる「喆」は字形通り多幸の祈願も含まれるから「哲」と混同できない。周睿羊(1991～ , 百霊愛透杯優勝に由り2013年五段→九段)の「羊」は、^{ひつじ}未年生れに因んだ名で「容」と風馬牛(読み方も接点の無いyángとróng)である。「堯」を大目に見ても「哲」「容」は許容し難いので4人中2人の名前は間違っているが、日本棋院『囲碁年鑑』の棋士名鑑の中国囲碁協会の部や^{ネット}電脳網情報で確認できるだけに、世界戦優勝総数で追い抜かれた年の日本碁界に於ける中国の一流陣の馴染度の低さが窺える。

藤沢秀行は聶衛平自伝・打碁集の日本語版に寄せた巻頭論考「中国の碁、聶さんの碁」の第2節「聶さんと私」で、初手合(1976.4.5)の前には「聶」の読み方も知らず「三耳^{さんみみ}」と言ったと書いているが、陳耀燁^{ようよう}(1989～ , 世界・国際戦準優勝2回に由り2006年三段→九段)や劉棣懷等と合せれば、中国棋士の氏名に難読漢字が多い事にも目を向けさせ囲碁の特質にも思いを馳せさせる。「燁・堯・喆・睿」を全て読める中国人は国民の約1%に当る囲碁人と同じ程度と思われ(石井が正しく書けた「燁」[yè]は「華」[huá]で類推し誤読する向きが圧倒的に多い)、^{イメージ}碁の理屈っぽくて取っ付き難い形象は本家の「名」の文化で照らせば浮彫になる。面白い事に、初の少数民族(朝鮮族)出身の世界王者の朴文「堯」は囲碁の堯帝発明

説と繋がり、李「哲」は現役時代の2013年に北京大学哲学学部に入學し棋界屈指の哲學者に爲った。更に翻って、「小林光十一段」は中国棋士の小林光一に抱いた「棋力十一段」とも言える畏敬を連想させ（中山典之も『昭和囲碁風雲録』第25章「囲碁界に曙光」第2節「新星出現」の中で、7大棋戦発足直前の趙治勲・小林光一の強さに対する国内の認識として、「七段」と思う人はいないのである。その実力は優に“九段以上”なのである」と書いた）、聶衛「平・兵」は当人の「均衡＋強硬」の棋風や囲碁の「和・戦」の二面性に合致する。碁の失敗から学ぶ事が多いのと同じく誤記・誤植も教訓と共に知的な刺激を与えるが、作者の著述専門家の水準との落差が殊に大きい『中国の碁』から原因究明を進めよう。

社会の常識と通じる盤上遊戯の二重の「待った無し」

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第7章「新布石の誕生」の第3節「ベストセラー」で、「木谷実六段・呉清源五段・安永一・四段共著」『^{〔ママ〕}囲碁革命・^{〔ママ〕}新布石法』の誕生を紹介し、100冊以上の本を書いた経験と第六感に由ってこれは才人安永の名著としか思えぬと断じる。短時日で才気の赴く儘に書き上げたこの本は哲学的・論理的・幾何学的な解説を駆使し、更に煙に巻く禅問答風の面白い文章で読者を引き付けて強引に納得させる筆力も偉いが、早碁の時は藤沢秀行に対しても平気で白を持つ安永老の棋力も全く大した物だったと言う。「但し、マッタが自由自在であることは申すまでもない。弟子であった故影山利郎八段（追贈）がこぼしていわく。/“安永さんも困ったもんだ。早碁を打とうと言うから五番ばかり打った。ウン、僕が黒だよ。時々向うさまのマッタありでね。一番だけ負けたら、その碁をしっかりと『囲碁春秋』に載せられちゃってねえ”/安永老ならそれくらいのことは当然の定石である。実は、中山典之初段も安永老にひどい目にあわされたことがある。/四十年の昔、中央会館でポケットとしていたら安永老につかまった。/“君が中山新初段か。一番打とう”/当然安永老が白を持つ。私は深く一礼して第一着を打ったが、老は私の石より早く白2を打つではないか。早い何の。五分間で私は片付けられた。“聞きしにまさる弱い奴だ。もう一番来い”と言われ、私は有難く打っていただいたが、何と、三十分間に五連敗である。/何しろ老の石は軽妙で、とても敵わない。恐れ入りましたと深々とお辞儀をしたら、安永先生いわく。/“もうやめるのか。すぐ泣き言をはざきおって弱虫め。お前は本当にプロの免状を持っているのか。小夜^{さよ}の中山夜泣^{なかやまよなき}石^{いし}とはお前のことだ。この弱虫め”/破れ鐘のような声が頭の上から降って来た。見物していたお客さんがドッと笑い出した。/降参するつもりでいた中山初段も、とうとう頭に来た。弱いのは分っているが、安永先生それはチト言い過ぎでしょう。私は頭を上げた。/“先生、少し考えてもいいですか”/“オー、いいとも。百年でも考えな”/それからの碁は、一局十五分になった。すると、どうしたことか安永大先生の石が急にヨタヨタになり、中山新初段の三連

勝である。/安永老はついに石を放り出した。/“つまらん。もうやめた。どだいお前の碁は長すぎる”/私は安永老の序盤感覚はプロの一流に匹敵すると思っている。村上文祥さんの中盤と、菊池康郎さんの終盤の三つを合体させたら、ことによるとタイトルが取れるのではあるまいかと思うのである。/安永老は、いや、まだ若かった安永青年は、新布石という絶好の材料を得て、また木谷実・呉清源というこの上ない看板を得て、才気のおもむくままにベストセラーを書き上げた。氏にとっては人生最良の日だったかと推察する。」

中山典之は30歳時の1962年に入段・二段昇進したので安永一の61歳時の逸話であり、同年に全日本アマチュア連盟初代理事長に就任した元^{プロ}専業と晩成の初段の腕比べは面白い。この余談は高手の場合も5分で1局の超早碁が有り得る事の裏付けとして興味深い、AlphaGo進化版の自己対戦の3秒1局の神速は100倍も上回るから到底追い付けない。馬曉春は対李世石のGoogleDeepMind挑戦手合の持ち時間各2時間を不平等と喝破したが、李の方は1.5倍にすべしという提言は早見え早打ちで有名な元中国王者らしいものの、想像を絶する新型強敵の時間面の優位性に対する戦前の過小評価を露呈させている。人工知能と戦う棋士には着手後5秒の確認時間を与え「悔棋」(待った)を認めて可^よからう、という馬の冗談半分の意見は「底線」(譲れない一線)に触れながらも半分の真理を含む。三好徹は「人間 藤沢秀行」(『読売新聞』1977年2月16日夕刊、読売新聞社編『激闘譜 第一期棋型決定七番勝負——藤沢秀行 vs 橋本宇太郎』[読売新聞社、同年])の中で、「いつぞや、彼は“待ったありなら、ぼくが一番強い”といったことがある。専門棋士をふくめて、居合わせたものすべてが、ふき出しながら全員一致で賛成した。人によっては“待ったありなら”なんて専門棋士たるもの、口にすべきではないというかもしれないが、こういうあけっぴろげなところが、やはり秀行流である。こんどは“待ったなし”でも日本一であることを証明したのだから、これは文句なしだろう」と説く。藤沢棋聖は『碁打ち一代』(読売新聞社、1981)第14章「強くなるために」の心得伝授で、棋力の向上に直接関係は無い対局中の態度や作法も大切にしたいと愛好家に呼び掛ける。「一度打ち下ろした石をはがしたりするのも論外である」の注意書きも入っているから、楽しみで打つ素人でも待ったは有ってはならぬという自明の理は無論分り切っている。『勝負と芸——わが囲碁の道』第4章「次代を育てる」第4節「国際化の時代」の中に、6~7年前から「一^{タンゲン}に薰^{ユウモラス}、二に馬」と口癖の様に馬の才能を高く評価していたと有るが、2人が待ったへの寛容を諸諱的に称えた事は直ぐ気付く様な悪手も避け難い故である。

『秀格烏鷺うろばなし』第1章「巢立ち」第10節「一目負けをめざして」の秘話の1つは、二段時の1934年の手合で堀憲太郎三段(1895~1941、36年四段)の待ったを許した事である。中盤^{たけなわ}で相手は好手の切りでなく手拍子の当て込みを打って^{しま}了ったが、「石を置いて、指が離れ、それから“?”といった。離れてしまったものは仕方がない。と、頭の中では思っても、指がみれんがましく、伸びたりちぢんだりしている。二回、三回手が出たり引っ込んだり。そ

うかと思うと、今度は“ふうむ”と唸って、首をかしげたりするのである。/“先生、どうぞ置き直して下さい”/私は横を向いていった。/“そう？そいじゃ！”/そのときの堀憲さんの、手の早かったこと。洪面がパッと明るい表情になって、そのうれしそうだったこと。/その碁、私は1目負けた……。」同年春季大手合で藤村芳勝（1897～1970、当時段位未詳、64年六段）の哀願で八百長に応じた事の懺悔^{ざんげ}に続いて、棋士生涯の中で情に流されて行った2番目に悪い事として告白する内容であるが、新布石流行の年に先端を追っている高川の勝負・倫理を度外視した温情は二面性を感じさせ、未練を断ち切れず禁則無視の厚意に甘えた堀の揺れは悪手への激しい悔恨の所産である。「離れてしまった」の「しまった」の当て字の「仕舞・終・了」を含む「～手終了」は、『現代囲碁大系』等で「～手完」「～手投了」と共に対局結果の記載に用いられる。文芸評論家小林秀雄（1902～83）の「雪舟」（『芸術新潮』[新潮社、月刊]1950.3）に、「私の雪舟に対する考えは極^{きま}って了^{しま}った」を始め「～了った」の表記が矢鱈^{やたら}に出て来る。その文と後出の「これ以上やったら、絵の限界を突破してろう」は、完成又は状態の変化を表す中国語の文末助詞「～了」と同じ用法であるが、「了う」が普通に使われた同年の本因坊戦決勝が世紀の争碁に為った事と合せて考えたい。

文芸評論家白川正芳（1937～ ）著『碁は断にあり』（三一書房、1985）の第Ⅱ章「プロの碁」に、「九 趙治勲——インタビュー・真剣勝負に生きる」（『潮』[潮出版社]83年7月号）が収録されており、第18期文壇囲碁名人（同年7月獲得）の作者が訊き出した新棋聖の談義には、好きな呉清源・坂田栄男の碁は1局1局が真剣勝負で——条件が違うから一貫性が無いと有る。竹刀だと1本目取られても2本目を返せば平気だが、真剣だともう後が無いから坂田の碁の様に此处で負ければ自分の命が無い感じになると言う。趙は呉の中国出身・十番碁体験と坂田の幼い時の苦勞をその真剣さの根源に挙げたが、坂田の覇者就位後に始まった秒読み厳格化は超真剣時代（造語）の到来の第一声^よと見て可い。『昭和囲碁風雲録』の「高川、本因坊九連覇」に見える様に、従来の秒読みはギリギリの残り1分に為ると記録係が「30秒、後1分です。40秒、50秒、55秒、58秒、お打ち下さい」と告げる方式であった。着手を促す敬語の要請が言い終った時点で大抵は65～70秒に達し、「明らかに時間切れなのだが、時間制限は碁の必要悪という観念があり、温情的に“お打ち下さい”の制度だったのである。」「50秒、1、2、3……」と読み「10！」を発声した瞬間に負けとする現行制度への改定は、長谷川章（1900～87、44年七段、65年引退・名誉八段）の「秒読まれ対策」^{はりがね}が針金であった。彼は「お打ち下さい」と促されても必ず「後何分？」と反問し、「有りません。打って下さい」と聞いても「弱ったなア。打たないと切れちゃうよう」と呟き、漸く石を1粒撮^{つま}むが頭の上でグルグル石を回しててなかなか打たない。時間は優に30秒は過ぎているのに大長老に対し相手は文句を言えず只苦笑^{ただ}して待つが、「中には気の短い先生もいる。梶和為五段（当時）などはその代表だった。青筋を立て、ムツとした表情だったが、何手か長谷川方式をやられると必ず爆発した。」「記録！

しっかり秒を読め！」と怒りの捌け口にされた記録係も人の子なので、何度も怒鳴り散らされると秒読みの声もつい荒くなり終盤戦の雰囲気陰しくなる。「こうして、カウントダウン方式、“十！”で自動的時間切れ制度は生れた。悠長な時代が終わり、機械的、合理的な秒ヨミ制度をこしらえたのは、長谷川長老や梶先輩の功績（？）である。」長谷川は後に坂田の前任として日本棋院第7代理事長（1975～78）を務め、梶（1922～2000、79年八段、逝去直前引退・九段）は初代世界王者武宮正樹の岳父だから、明治世代の「不正」に対する大正世代の義憤が昭和の改革に繋がったのは奇妙な因縁である。長谷川の1歳年少の安永一に対する大正末年生れの影山利郎（1977年七段、90年逝去）の不満と合せて、**社会生活の常識と通じる盤上遊戯の二重の「待った無し」**に就いて考えさせられる。

勝敗を決めかねない着手の重みと寸秒^{とうと}の貴さ

『広辞苑』の【待った】は「①囲碁・将棋・相撲などで、相手の仕掛けて来た手を待ってもらうこと。また、その時に発する語。②転じて、一時、進行をおしとどめること。“着工に一をかける”」、【待った無し】は「①囲碁・将棋・相撲などで、“待った”のできないこと。②少しの猶予もできないこと。“一の催促”と為る。『日本国語大辞典』の「まっ-た【待一】」の「■『連語』②相撲や囲碁などの勝負事で、自分が不利とみて、相手の仕掛けた手を待ってもらう時に発する掛け声」は、用例2点の後者が囲碁関係の「吾輩は猫である（1905-06）〈夏目漱石〉——“そこを切られちゃ死んで仕舞ふ。おい冗談じゃない。一寸待った”」である。「■『名』相手の仕掛けた手を待ってもらうこと。次の行為に移るのを止めること」は、用例（3点）初出の「大阪穴探（1884）〈堀部朔良〉——“何ぞや、彼の相撲に『待タ』の風ある是なり”」の通り、「残った」を連想させる相撲用語が由来かと思われる。「まった-なし【待無】」の「【名】囲碁、将棋、相撲などで、“まった”ができないこと。転じて、一般に、少しの猶予もできないこと。またなし」では囲碁が一番目と為るが、初出の「雑俳・玉の光（1844-45）“待ったなし・いやいな誰があかべいら”」は、構成要素の「待った」よりも早く現れたので不思議と共に否定形の先行・常用を思わせる。2点中の次の「闘牛（1949）〈井上靖〉“今日と明日と明後日の三日だけが、津上たちにとって絶対に待ったなしの戦ひであった”」は転義の初期の用例であろうが、【待一】■の最後の用例「憲法講話（1967）〈宮沢俊義〉四“文化勲章に年金をつけよう、といい出したとき、憲法から『まった』がかかった”」の話題と繋がる。中篇小説『闘牛』で翌年に芥川龍之介賞（1935年創設）を獲った作家井上靖（1907～91）は、数々の名作を生み出した大家として76年に文化功労者に選ばれ文化勲章を受章した。戦後『毎日新聞』文芸部副部長として囲碁本因坊戦と将棋名人戦（47年、第6期[3期・6年ぶり再開]～）の運営にも関り、『現代囲碁大系・岩本薫』の「高野山決戦」と題する第19局（第3期本因坊

290（876）

戦挑戦手合決戦三番勝負第1局，[先番] 橋本宇太郎八段対岩本七段，1946.7.26・8.15～17，305手完，白5目勝ち）の第1譜（1～25）解説「序盤は淡々」にも，「設営は毎日新聞社の井上靖氏（現作家）が当たった」と記載されている。日本ペンクラブ（1935年成立）第9代会長（81～85）在任中ノーベル文学賞候補にも為ったが，**昭和の碁界は第4代会長（48～65）川端康成の他に井上も深く関与したので贅沢過ぎる**。「待った無し」の転義は観戦に触発されたのなら**国語に対する囲碁の貢献**に数え得るが，碁は橋本と同年齢の彼の文芸部時代の部下山崎豊子の作品にも出るから存在感が大きい。

『日本国語大辞典』の「あたり【当・中】『名』」の「**碁**碁で，次の一手で相手の石が取れる状態。また，その状態にする一着。「両当たり」「当たりをかける」」の用例は，「雪中梅（1884）〈末広鉄腸〉下・五“盤上に石を下す音バチバチ。『サア当りだ』『一寸お待ち下さい』『生死の界（さかひ）になって，俟（まって）て堪るものか』”」である。この明治の政治小説の名作を著した新聞記者・政治家（名は重恭，1849～96）の号は，「鉄心石腸」（『広辞苑』の項＝「鉄や石のように堅固な精神。鉄石心腸」）から取ったが，中国語の「鉄石心腸」は**感情に動かさぬ冷徹さ**の意が強くこの「待った」拒否に妙に合う。夏目漱石の作中の「切られちゃ死んで仕舞ふ」の悲鳴と共に**生死に関する大変さ**が現れるが，「待った」が出来ぬ事と同じく**少しの猶予も出来ぬ事も存亡・勝敗の行方を決めかねない**。中山典之は旧制秒読みの「……58秒，お打ち下さい」の猶予付きの発想を解説した後，「高川も杉内も，この制度下でうめき声を発しながら死闘を繰り返していたのである」と付け加えたが，その時代にも件の杉内雅男の**待った無しの催促で棋士生命を損ねる敗着が出た例**が有る。『現代囲碁大系』第12巻『呉清源 下』（藤井正義執筆，1982）の「無念，藤沢庫之助」と題する第10局（第3次打込十番碁第6局，1953.3.2～4，[先番] 対 [先相先] 藤沢）の第7・8譜（124～161，162～221）解説「痛恨」「碁盤の向き」に，観戦記者・囲碁著述家山田虎吉（1903～89）の記述の引用を交えてその一幕が再現してある。

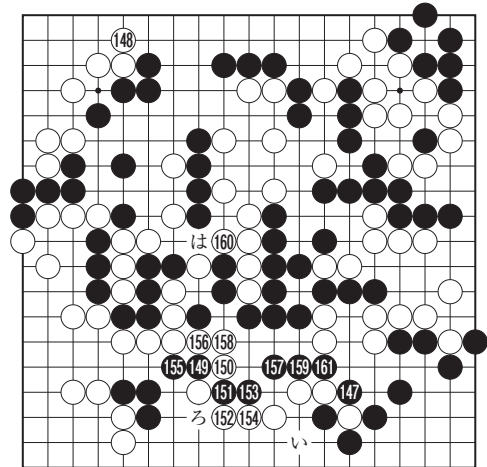
「黒47の抜きは，大寄せとしても大きい，さらに恐ろしいねらいがひそんでいた。/ “記録の加田四段が例によって白のために何十回目かの秒を読んでいて。三十秒！四十秒！という声がようやく薄暮の中の清流にまじって妙に身に沁みて響く。次いで五十五秒！藤沢動じない，五十八秒！この時やや動じたが，まだ石をおかないのではたで観ていた杉内君が『打たなきゃ時間が切れますよ！』といった。藤沢あっと驚いて，どっちだったかな，さあわからない！といって上辺48へゴツンと石を下ろした。碁盤でいうと，この上辺は藤沢氏にとっては丁度手前にあたっている。これでついにこの第三次十番碁の運命は決まるとみてもよい。つまり藤沢氏が，この48の手でいのコスミを選んでおりさえすれば，最早碁はそれまでであったからだ。藤沢氏は杉内君に注意されて打ってから，『打たなきゃ時間が切れるか，正にその通りだ』と口の中でいうので呉氏も釣られて笑っていたが，まだこの時はこれでやっと勝ちになったと安

心していたろう。それから呉氏がこの下辺の方をジロジロ見出してから十六分。49 とツケてこられて藤沢氏はびっくりしてしまった。これにはいい地点のコスミがない以上、どうしても黒に手になるところだ。結果はついに白は辛苦経営した右辺の大石を与えてしまったが、今度代償として得た真ん中の白の大石の生還は右辺に比べるとソロバンにも何も合ったものではなかった”（『呉・藤沢十番碁を顧みて』山田覆面子）/ 白 48 が敗着になった。ここでは下辺白いとコスんでおかなければならなかったのである。黒 49 という痛烈な手が生じた。」「黒 57 が妙手。黒 61 まで大振替りになったが、次に黒ろとはが見合いだから、これは白がいけない。」（図 11 参照、47～61 は通算 147～161）「白は一分間で最後

までネバったが、二百二十一手で投了。碁盤の向きが変わっていたばかりに藤沢氏はあたら千金を海へ落としたことになった。それは時間が切れると注意されて向こう側へ持って行く手が、そっちの方へ伸びずについ一番近い手前へ下りてしまったという勘定だが、それにしても碁盤の位置でこの局の勝敗が決まったということは何としても惜しい」、という山田総評の感慨の中の「^{あた}可惜千金」は明暗を一瞬に分ける寸秒の貴重さをも形容できる。

藤沢庫之助は第 2 次対呉打込十番碁（1951.10.20～52.6.13）の 6 勝 2 敗 1 持碁で先相先に打ち込まれた後、敗者が挑戦した場合は互いに受けるという約束を生かして復帰戦を希望した。^{リターン・マッチ}何故負けたのか納得してみたい、^な仮令定先に^{たとえ}為っても 2 目に為っても意に介さない、という異常に強固な意志と日本棋院棋士の代表の使命感に燃える彼は、少し休養して^{コンディション}状態の良い時まで待つて欲しいという読売新聞社の意向や、呉清源との対決に集中して棋院の行事に参加しない事への内部の非難を顧みなかった。1 勝 4 敗の角番で^{コミ}込無しの白番に当る本局では「辞表を懐にして来ました」と宣言したが、「気合いの応酬」（第 2 譜 [22～50] 解説の題）で^{持ち時間}過度消費の悪い癖が出た。呉と藤沢は黒 11～17 で武宮正樹が其其「発展性が無限に有り/皆無」とした定石を打ち、呉が序盤で 3～5 分と殆ど勘で打っているのに対して藤沢は湯水の如く考慮時間を使い、白 30 の 2 時間 34 分と 32 の 1 時間 29 分で 13 時間中の 31% も費やして^{しま}った。（図 12 参照）観戦記（『読売新聞』1953.3.7）に曰く、「これでは最後にまた一分碁になってしくじるのだからといつもヒヤヒヤさせられているものの中から苦言を試みる人があるが、

図 11 呉・藤沢第 3 次打込十番碁第 6 局，呉清源九段（先番）vs. 藤沢庫之助九段（先相先），第 147～161 手，221 手完，黒中押し勝ち



『現代囲碁大系』第 12 巻『呉清源 下』111 頁の第 7 譜に拠り作成。

藤沢氏は馬の耳に念仏で何といっても聞かない。」実際は『大系』の第6譜（108～124、後掲図13）解説の題の通り「時間がない」展開に為り、「白24に回って白は優勢を確立した。しかし藤沢には、もう時間が一分しかなかった。/“呉氏の15は手拍子の自重。中の白は丸々のみ込んだが、白16とハネてはこの碁白容易に負けられまい。記録の加田四段が五十八秒！といったら、藤沢氏ものすごい形相をして左辺24からブスリと切った”（昭和二十八年三月十三日読売新聞観戦記）」（15・16・24は通算115・116・124）大平修三・加納嘉徳（1928～99、68年九段）と共に「戦後新三羽鳥」と言われた加田克司（1931～96、67年九段）は、道場時代の本谷實師や師匠代理梶原武雄の影響も有ってか序盤に掛ける長考が有名であり、その秒読みで本谷・梶原・橋本昌二と並ぶ長考派巨頭を苦しめたのは皮肉の様に思える。1分碁^{きわど}の際疾い危機を数十回も乗り越えて土俵に残った粘り強さは本谷と双璧を為すが、1度だけ「58秒！」に対応できず催促に動揺して最善を尽せなかったのは不運である。敗戦の引責で棋院を脱退し6年後に漸く復帰したので20世紀の最も悲愴な争碁と言えるが、その転落は初代九段獲得の年に「闘牛」に出た時間面の「待った無し」の絶対性を思わせる。

図12 図11と同局、第1～37手

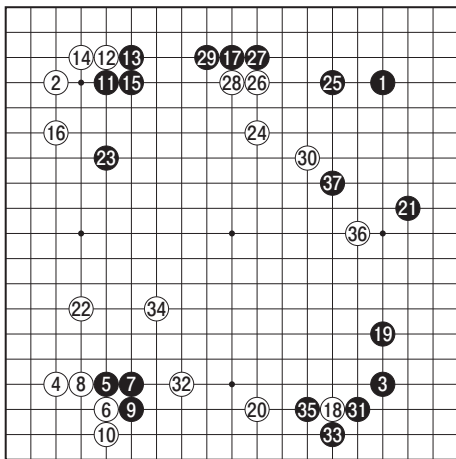


図11 文献101・103頁の第1・2譜に拠り作成。

図13 図11と同局、第108～124手

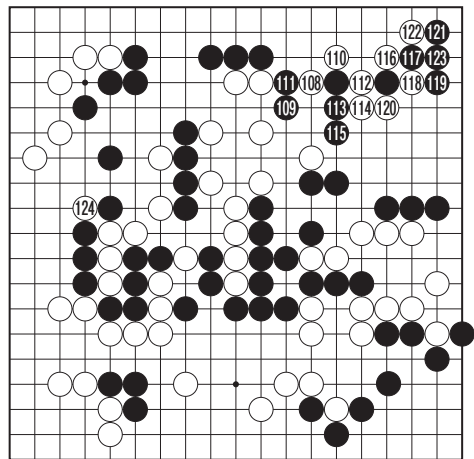


図11 文献109頁の第6譜に拠り作成。

日本規則^{ルール}の反則に見る道徳的潔癖と完璧志向

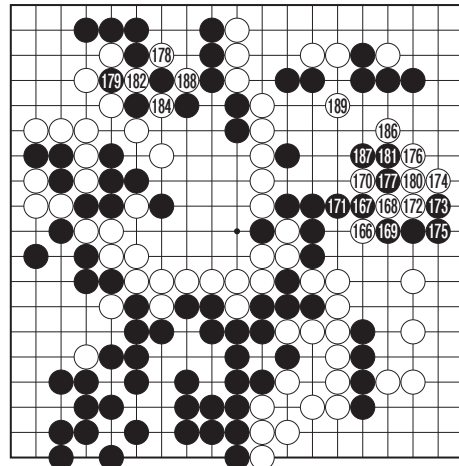
杉内雅男の注意の声掛けと藤沢庫之助の躊躇の言葉が交されている内に時が更に過ぎ、慌てて石を置く反射神経は恐らく^と疾うに時間切れと為っている認識が根底に有ったろう。碁盤の向う側に在る好点への着手が予定に無かったのなら向きは無関係のはずであるが、これ以上1秒

でも遅れてはならぬという意識に駆られたとすれば道徳的な潔癖を感じる。日本規則での反則負けに見る日本的な道徳的潔癖の例として林海峰の2手打ちが思い当たるが、1987年10月8日の名人戦決勝七番碁第3局（対加藤正夫名人）で起きた珍事の顛末は、『1988年版・囲碁年鑑』（『棋道』5月号臨時増刊号）の「加藤、疾風の初防衛 / 第12期名人戦（朝日新聞）」（田村竜騎兵）で次の様に書いてある。「二日目に入り、白番の林が優勢。ただし残り一分の秒読みで、夕食休憩に入った。/ 加藤の手番で、打つ手は決まっている。その次の白の一手が、勝利への決定打となる。再開後しばらくして、林は勝着となるべき手を打ってしまった。加藤がまだ打たないのに、である。立会人の岩田達明九段が、あわてて

記録係から棋譜を取り上げ、盤側がざわめく。/ “あつ、いけねえ。なにをやってるんだ” / 絶句する林。ややあって“負けです。私の負けです”といさぎよく宣言した。/ なかなか記録係が秒を読まない。忘れているのかな、と思った。だとすると、いつまで考えているのは卑怯である。で、自分の手番と信じ込んでいる林は、エイッとはばかり打ってしまった。もし“なぜ秒を読まない。”と一声かけていれば、事件は起こらなかった。」（図14参照）こんな形で勝ち碁を落しては如何にタフさが身上の林でも短期間での立ち直りは困難であり、加藤の地元の福岡市で打たれた第4局は何時もの粘っこさが影を潜め相手の勢いに押し潰された、と言うが、共に終盤力が頂上級の石田芳夫に次ぐ選手権戦史上2例目の2手打ちだけに掘り下げたい。

『現代囲碁大系・石田芳夫 上』第20局（第8回プロ十傑戦決勝五番勝負第3局，1971.6.5，[先番] 対梶原武雄，151まで黒反則に由る白勝ち）は、「反則負けの一局」と題した解説で次の様に紹介されている。「心の師，人生のバックボーンといえどももちろん木谷先生である。実戦の師といえは梶原九段はその一人として，先ず挙げなければならない。その尊敬する同九段と晴れの舞台での手合わせである。/ しかし，その檯舞台で“反則”という前代未聞の大失態を演じ，本当に申しわけなかった。いかに勝ち負けの争いとはいえ，そんな勝ち方を喜ぶ勝負師はいないだろう。ましてや求道師を任じる同九段であってみれば尚更である。将棋に反則が比較的多いと聞くが，碁では非常に稀でそれを自らしでかそうとは，まことにお恥かしい次第である。」第6譜（86～100）解説「反則の伏線」では黒87（図15中の▲）の大変な打ち過ぎ

図14 第12期名人戦挑戦手合七番勝負第3局，加藤正夫名人（先番5目半込出し）vs. 林海峰九段，第166～189手，189手完，白反則，黒勝ち



179劫取る 182同

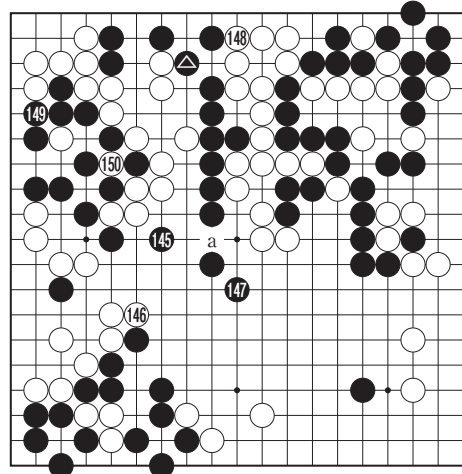
『1988年版・囲碁年鑑』54頁の第2譜に拠り作成。

に遠因を求め、第8譜（125）解説「単純な反則」では黒145を意味不明・中途半端な大悪手（147と逃げながらaの割り込みに備えるのが正しい）とした上で、既着の147を劫立てした心算で151と取り返した反則は馬鹿馬鹿しいほど単純だと述べる。「一時間余も余している黒が起こしたのが不思議といえは不思議、しかし、秒読みになると度胸が坐り、かえって相手方があせるという心理はままたこり得ることだが……。」最終譜（147～151）の「9弱ったなあ!？」に拠ると、相手の「あれ、弱ったなあ」の声を聞いても未だ何の事か分らず、記録係に「反則負けですね」と言われて初めて気付いた。七段時の不測の事態と雖も時間的に余裕綽綽の「^{いんど}電^{しゃくしゃく}脳^{コンピュータ}」の狂いは神の悪戯かと思われ、立会人でなく

記録係に由る即座の反則負け宣言も将棋界でも憚られ勝ちなので珍しい。

河口俊彦は『人生の棋譜 この一局』の「一九八九年度」の第3篇「吐血の局」で、東西対決と為る第3期名人戦七番勝負の第1局（42.7.11～13）の山場を活写している。神田辰之助（1893～1943、35年八段、64年追贈九段）が胸部疾患の末期症状を抱えて、木村義雄（1905～86、26年八段、名人8期、52年引退・十四世名人襲位）に挑む初戦で、「関西飛将軍」は病魔・炎暑・疲労の所為か3日目に悪手を続けたが、名人は必至（「必死」が普通。王手に対して受けが無く次に必ず詰む状態。縛り手）を掛ける機会を逃して形勢が逆転した。両者15時間の持ち時間を使い切って残り1分と為った第1図（図16）は神田必勝形だが、続く▲7二銀は「挟撃形で筋のようだが、悪手の典型。中級者がよくやるミスで、なぜ神田がこの手を指したのか不思議である」。大凡並みの人の言わば「中級錯誤」も高手が犯すなら「低級錯誤」の部類に入るが、「木村はこの機を逃さなかった。右手をふところに突っ込み、左の乳首をつかむようにしながら左手を伸ばして△4一角。/お得意のポーズをされて、神田は自分がまずいことをやったのに気がついた。/（中略）/悪手は一手だけなら罪は軽く、まだ収束はある。いけないのは二度つづけることだ。プロはよく判っているのだが、ついやってしまうのである。/秒読みに追われ、気を静める余裕もなく▲2二龍と入れば、すぐ△3二銀と妖しげな受けを指された。/このときの神田の気持ちは察しがつく。決め手を逃がしたが、まだ形勢はよい。勝つ手はいくつもある。どれにしようかと迷う。ひらめいた手を決めかねていると、五十秒五十五秒、

図15 第8回プロ十傑戦決勝五番勝負第3局、石田芳夫七段〔先番5目半込出し〕vs. 梶原武雄九段、第145～151、151まで黒反則に由る白勝ち



⑮劫取る（⑮の右）
『現代囲碁大系』第37巻『石田芳夫 上』第208～209頁の第8～9譜に拠り作成。

三、と読んで、十と言われたら負け、というルールができた。/話が横道にそれたが、だから木村の“神田君！時間だよ”は大変度胸のある一声だったのである。反則負けで勝とうとするなどは、武士道精神に反する、という風潮もあった。」**秒読みの関門を無数に潜り抜けて来た棋士の講釈は真に^{せま}逼り深層の真相を明らかにしているが**、木村名人の一喝の心理に対する解説は杉内雅男七段の着手催促への理解の手掛りに為る。「武士道」は『広辞苑』で「日本の武士階層に発達した道徳。鎌倉時代から“弓矢の道”としてあり、江戸時代に儒教とくに朱子学に裏づけられて確立、封建体制の精神的な柱となり、明治以降国民道徳の中心とされた。主君への絶対的な忠誠のほか、信義・尚武・名誉などを重んじる。葉隠“一といふは死ぬ事と見付たり”」と説明されているが、実力制に由る将棋の初代(1938年即位)名人木村の名前に有る「義」や、中原誠(1947～^{キー・ワード}、選手権3期以上に由り73年九段、72～76年名人5連覇に由り十六世名人)の「誠」、「名人」(同辞書の「①技芸にすぐれて名のある人。名手」)「③もと囲碁・将棋で九段の技量のある人の称。同職の間で推し、江戸時代は幕府が許した。現在は選手権の名称の一つ。“一位”」の「名」、日本語で「勝負」と同音の「尚武」(同辞書の項＝「武事・軍事を重んずること。“勤儉”“一の気風”」)は、中国で「軍国主義的」と誤解され勝ちの「武士道精神」の鍵詞として再評価を導く。

米国の社会人類学者 R. ベネディクト(1887～1948)は『菊と刀——日本文化の型』(46)の中で、菊の優美と刀の殺伐の2極同居に象徴される日本人特有の複雑な性格・気質を解明し、行動・思考様式から西洋の「罪」の文化に対する日本の「恥」の文化を探し当てた。武士道精神は尚武を除いて忠君を貫き信義を守り名誉を重んじる志向が儒教の道徳と一緒に、「恥」の文化も栄辱に敏感な点で中国の「名」の文化と通底する。江戸～昭和初期の囲碁・将棋界の当世唯一の最高実力者「名人」は、戦国(1467～1568)・安土時代の武将織田信長(1534～82)が算砂(日海。1559～1623、03頃より一世本因坊)の凄腕を讀えた言葉が語源だと言われるが、「名人」の和製語義に纏わるこの伝説は日本囲碁の隆盛に対する「武・道」の闘争心・探究心の推進を思わせる。将棋界初の実力制名人・永世名人木村義雄の命日(1986.11.17)は将棋連盟が75年に定めた「将棋の日」に当たるが、開催の旧暦11月17日が由来と為る江戸時代の將軍等の觀戦した御城将棋は、寛文年間(1661～72)に発足し1716年に式日規定の布令で制度化したが、同日挙行・同年終了の御城碁(1626頃～1864)に大きく遅れた。自分及び一門の名誉・待遇を求める真剣勝負の必死さは、開始の3世紀後に設立した日本棋院でも3/4世紀(～1999)余り継がれ続け、特に木谷道場(1937～74)出身者の7大選手権獲得(1969、70～2003、05～08)、昭和末期の木谷実一門に由る4年連続全7冠制覇(85～88)、平成の直前に始まった国際化時代の日本棋士の世界戦優勝(88～92、96～98、2000、03、05)等で成果が顕著に現れた。

昭和の棋戦解説に散見された漢籍由来の「武運」(『広辞苑』の項＝「武士としての運命。戦

いでの勝敗の運。“一つたなく敗れる”」, 成句項【武運長久】=「武運が長く続くこと。“一を祈る”」)は、棋士・棋戦の運命・行方を武士・戦争に擬し武士道的な発想が感じられる。参照が指示された【騎士道】は第6版で、「(chivalry) 中世ヨーロッパで、騎士身分の台頭によって起こった騎士特有の気風。キリスト教の影響をも受けながら発達、忠誠と勇気に加え、敬神・礼節・名誉・寛容、また女性への奉仕などの徳を理想とした」と為り、下線部分は第7版で「教会信仰の守護、異教徒討伐、弱者保護、高貴な女性への奉仕、そして礼節・名誉・寛容」に変えられた。狭義的な規定の中の教会信仰の守護・異教徒討伐は武士道の主君への絶対的な忠誠・尚武と通じ、礼節・名誉も武士道と共有し、寛容や弱者保護・(高貴な)女性への奉仕の慈愛は更に儒教の恕・仁の徳目と共通し、儒教が重んじる忠恕(忠実・同情心)は武士道の信義や騎士道の仁慈と重なり合う。【騎士道】の従来の語釈中の「敬神」は儒教の天・神への畏敬と類似し、『日本国語大辞典』で「座右の銘として引かれることが多い」と特筆される和製熟語「敬天愛人」も、洋学者・教育家中村正直(1832~91)の随筆「敬天愛人説」(68)に由来したが、中国古来の「敬天愛民」(初出は『元史・釈老伝・丘処機』)と似通い、孔子・孟子が「仁」の本質を要約した「愛人」(人を愛する)に基づく処が、思想・行動の「脱亜入欧」論の擡頭(85)前の明治元年に^{なお}尚根強かった儒教の影響を窺わせる。洋の東西を問わぬ一連の普遍的な価値観は17~20世紀の^よ囿碁王国日本で能く体现され、中国語の「礼義之邦」と日本語の「礼儀の邦」が示す道義・信義と律儀・儀式の兼備も印象付けられる。

中国の六芸(周代[前1046~前256]に士以上が必ず学ぶ^べべき科目として定められた6種の^{りく}技芸)の中で、礼・楽に次ぎ御(騎馬術)・書・数の前に出る射(弓で矢を射る術)は日本で弓矢の道に発展し、武士道の源頭と為った上に明治以後は武道の1種として「弓道」の名で普及した。中国で士君子の嗜みとされた四芸(手を使う4つの^{ぎよ}技芸)の^こ琴・棋・書・画の半分も、求道精神が旺盛な日本人に由って棋道・書道(中国語は「書法」)に高められた。日本の主要な公式棋戦は悠久な伝統と濃厚な儀式性に由って中国の棋界で羨ましがられるが、華道の観賞性と対を為す茶道の儀礼性は中国文化を昇華させた側面が有る。中国で廢れた「和敬清寂」(「敬天愛民」を立項した国内最大規模の『漢語大辞典』[漢語大辞典編輯委員会編、羅竹風主編、全12巻+索引1冊、上海辞書出版社、1986~94]でも不採録)は、『広辞苑』の通り「(宋代の劉元甫^{りゅうげん}の語からという)茶道で、主人と客とは心なごやかにお互いをうやまい、茶室・茶道具などは清楚・質素を心がけること。利休が茶道の精神を表す語として使った」である。この4字熟語は棋道に当て嵌めれば、他者に抱く和気や秩序との調和、相手への尊敬や神髓への畏敬、^{イメージ}形象の清楚や気品の高潔、作法の洗練や技芸の妙趣が想到する。「敬天愛人説」執筆の100年後ノーベル文学賞を受けた川端康成は「深奥幽玄」と揮毫し、掛け軸で日本棋院の特別対局室を飾った彼の造語は棋道の点睛の金言と為った。2000年代中・後期の中国覇者古力(1983~ , 06年LG杯世界棋王戦優勝に由り七段→九段、天元6期[03~08]・名人5期[05

～09]・世界戦優勝8回[05～14, 中国最多])は、最盛期に「幽玄の間」への憧れを以て日本の棋士こそが真の^{プロフェッショナル}専業者だと称え、理由として世界戦の成績に拘らず専ら棋芸を究めようとする姿勢を挙げた。「和敬清寂」の1字を含む「清く・正しく・美しく」も日本の囲碁人の良風に数え得るが、実業家小林一三(1873～1957)が自ら創設した宝塚歌劇団(13年発足)に与えた遺訓の理想は、世界囲碁史上の第2黄金期の昭和の日本で度々後世へ残る美談に現れる。「敬天愛人説」出現の100年後に林海峰名人が本因坊戦決勝で見せた美徳が極致に為るが、相手の60年代前期の覇者坂田栄男は盤上の武闘へ没頭する際に不作法も多いから好対照である。

『現代囲碁大系・高川格 下』第22局(第11期囲碁選手権戦決勝三番勝負第2局, 1967.1.20, 対[先番]林海峰八段, 259手完, 白4目勝ち)の解説「記念すべき優勝」の最後に、「第一局の思い出話になるが、終盤になって私の体の状態がわるくなり、林さんの手番のとき、やむをえず別室で休ませてもらった。すると間もなく、林さんが投了したという知らせがあった。もしあのまま林さんが打てば、私は対局を続行できず棄権負けという事態になったかもしれない。林さんの人柄のよさを思い知らされた出来事だった」と有る。大手合で先輩に待ったを勧め友の為の八百長も請け負った彼の優しさも半端ではないから、この絶賛は林の母語で言えば至高の「棋品」(盤上遊戯を行う人の品格)への敬意である。『日本国語大辞典』の【棋品】は語釈の「囲碁または将棋で、その作品(棋譜)にたゞよう品格」のみで、由来も和製扱いか否かも不明のこの単語は作品の格調を指し人格とは次元が異なるが、日本語に無い中国語の類義語「棋徳」(盤上遊戯を行う際の^{モラル}道徳)は中国では極めて重視される。安永一が名前を誤記した董文淵は稀有の囲碁・^{シャンチー}象棋(中国将棋)両刀使いの高手でありながら、相手の思考を妨害する悪質な盤外作戦等で「棋品不佳(不良)」と判定され碁界から追放された。小説家江崎誠致(1922～2001)は坂田栄男の棋士人生を描く実録長篇『石の鼓動』(双葉社, 1973)が有り、「エピローグ」の前の第24章「八連覇成らず」で第23期本因坊戦七番勝負(68.4.30～6.28)に焦点を当てる。黒番勝ちの第1・2局の後5局とも白番の逆転勝ちという勝負の不思議な機微に就いて、必死に追う者が勝っているのだの対局も終盤に近づくに連れ壮絶な光景が展開され、石に噛り付くという言葉が決して安っぽい表現には為らない姿で2人は勝負を争い、特に48歳の坂田は見る者に鬼気を感じさせ、それが功成り名遂げた2人の姿であるだけに痛ましい印象を与えた、と言う。「第五局の黒番を惜敗し、カド番に追いこまれた坂田白番の第六局、微細の局面のまま大よせにはいったときのことである。彼は一手打って手洗いに立った。そして戻ってくるや、いきなりゴケに手を突っこみ、つづけて二手打とうとしたのだ。/そんなところで二手打てればむろん碁は楽勝である。しかし、彼は別のことを考えていたのか、一旦石をもどしたゴケにふたたび手を突っこみ、こんどはほんとうに打とうとした。/“ん。”/と坂田は奇妙な声を発した。/“僕の番です。僕の番です。”/林海峰が二度くりかえした。/“変だと思った。お恥ずかしいや。”/坂田は呟いてすぐ緊張した姿勢にもどった。その情景

を目撃していた観戦記者は、何故かわけもなく涙が流れたという。/坂田はこの碁に勝って、勝負を最終の第七局に持ちこんだ。」林の制止は得失を度外視して彼我の真剣勝負を首尾善く・味良く完遂しようとする為で、微塵の打算も無い故に非情な対戦を数々見て来た観戦記者（江崎）に最上の感動を与えたが、反則負けで勝つのを潔しとしない棋道精神に於いては日本人以上に強いのかも知れない。

昭和の名家の「真剣・真面目」と「敬神・愛人」の気風

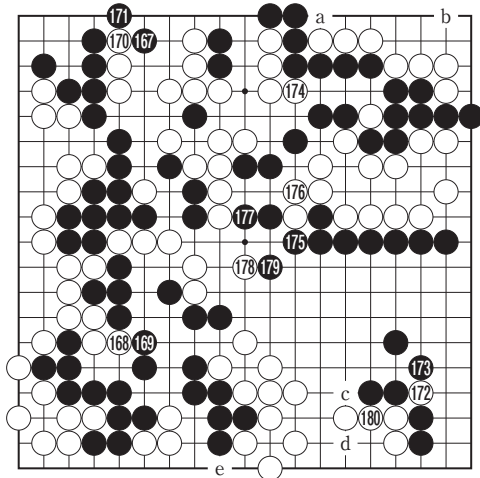
『昭和囲碁風雲録』第22章「林海峰と木谷一門の時代」第3節「続々と木谷一門」で、中山典之は同じ非凡な努力家の林・加藤正夫・趙治勲の類似性を指摘しその人柄を讃える。曰く、木谷道場の悪餓鬼どもの中でも勿論優等生は少なからず居り、その代表者は古くは中山繁行五段（1921～78、55年三段、75年引退四段、歿後五段追贈）であり、新参の方では加藤正夫九段であつたらしいが、成るほどこのお2人は謹厳実直、真面目も真面目で修身のお手本の様な存在ではある。「私が見たところ、知る限りでは、無条件にハッと頭を下げる人を日本棋院の棋士中に数えるとすれば、林海峰、加藤正夫、趙治勲のお三方を挙げる。この方々のすることなら、まず間違いはないと信じているほどのものだ。」第25章第3節「趙治勲の恐ろしさ」でも3人を並べて論じ、「趙治勲先生は恥ずかしがり屋である。慌てるとドモる癖がある。そう言えば、加藤正夫、林海峰の両先生も、慌てるとドモる傾向があつたが、正直一途な人は予想外の事態に直面すると度を失うらしい。私の尊敬する方々である」と語る。日本語の「真剣」は「本物の刀剣。本身ほんみ」から「真面目。本気。真実」の意が派生し、和語の「真面目まじめ」は「真剣な態度・顔付き」「真心が籠まごころっていること。誠実なこと」の両義を持ち、準和製漢語の「真面目しんめい」（「しんめくはく」とも）は中国語と同じ「本来の姿」から転じて真価を表し、和製語義の「真面目まじめ。実直」も有るが、この囲碁3強国出身の日本棋院棋士の勝負・人生は「真剣・真面目」の模範と言える。和製熟語「真剣勝負」は真剣で勝負を決することから命懸けすることの譬えに為るが、斬り合いの中で相手に反則負けを回避させた林の義挙は真剣さと真心の真価を示している。坂田栄男が2手打ちをしたなら実力制名人・本因坊の最初の3人が揃う事に為るが、選手権史上4人目の名人・本因坊趙も初の七番勝負で反則手を打ったから寔まことに恐ろしい。

『昭和囲碁風雲録』の「続々と木谷一門」の次の「大器大竹、颯爽と登場」に、趙治勲八段が挑戦する第5期名人戦の第4局（1980.10.8～9）の波乱が詳述されている。1勝2敗の大竹英雄は打ち回しが冴え不動の勝勢を築いたかと思われたが、2日目の夜戦になって早見え早打ちの名人も持ち時間が無くなって遂に形勢が逆転した。俱に残り1分の秒読みの中で「30秒、40秒」の声に追われながら必死に手を読む趙は、ふと顔を上げて記録係彦坂直人四段（1962～，92年九段）に「僕、劫取り番？」と訊く。1人で1手毎の消費時間と着手時刻を記し棋300（886）

譜を最低2枚書き且つ秒を読む新米の記録係は、本来なら助手が3人欲しい終盤の土壇場でこう訊かれて大慌てし「ハイ」と返事した。その取り敢えずの応答を聞いて趙は劫立てをせず直ちに劫を取り返したが、当時の規定では対局者が記録係に劫取り番か否かを訊く権利が有った為に、巡り巡って立会人を務めた石田芳夫と関係者の協議の結果「無勝負」と裁定された。以後「記録係は対局者の着手に就いて責任を負わない」と規定が改定され、**昨今の日本社会の自己責任厳格化を先行した様に盤上の事の責任は全て対局者に帰属した。**行き直しの第5局（10.22～23）で奪冠した趙の要請で記録係も翌年から2名制に移行し、一握りの記録名人を除いて神懸^がり的な対応が出来ない重責・重労働は漸く軽減に至った。師匠の酒井利雄（1919～83、46年六段）に烈火の如く叱咤^{しった}された彦坂（中部総本部所属）は、2016年8月18日に日本棋院史上19人目の公式戦通算1000勝（544敗3持碁1無勝負）を達成したが、**昭和の黄金期の大勝負は脇役まで後年に大物に為るほど豪華絢爛の异彩を放っていた。**

『現代囲碁大系・高川格 下』の「十年目の恋人」と題した第13局（第16期本因坊戦挑戦手合七番勝負第2局、1961.5.14～15）は、挑戦者坂田栄男の白番1目半勝ちを許し本因坊9連覇で1度も無い劈頭2連敗を招いた。最終譜（181～271）解説「十期ならず」は第3・5局の半目負けと1～4の敗退に就いて、遂に10連覇の夢が打ち碎かれた後に書家の柳田泰雲（名は伊秀、1902～90）から、「九期でちょうどよかったですよ。プロの段だって九段止まりでしょう。十は完全の数で、神様の数。九までいけば人間として最高なんです」と慰められた事を記している。黒167が敗着（図18中黒a・白bと利かしてから下方に回り、黒c、白d、黒eと為れば少し残っていた）、白180の逆寄せが大きくこれで負けにした、と第7譜（142～180）解説「逆寄せを打たれる」は結論を付けている。『碁は断にあり』の「プロの碁」章に所収の「石井邦生九段との四子局」に拠ると、石井は非專業の場合は100手から150手ぐらいの間で勝負が着くが專業はもっと先が長い、と指導碁の経験に基づいて文壇囲碁名人・本因坊経験者の白川正芳に教えたが、100～150手の間に大勢乃至勝敗が決る事も間間有る棋士は確かに素人ほど崩れ易くない。「リターンマッチに失敗」の第16局（第18期本因坊戦挑戦手合七番勝負第5局、1963.6.5～6）の第7譜（135～166）解説「痛恨の一手」でも、優勢の儘大寄せに入った時の黒163が痛恨の敗着（平凡に黒166の尖を決めれば後は白a、黒b、白c、黒d、白164、黒eと運んで確実に残っていたのだ）、白166の逆寄せを打たれ逆転したと顧みる。（図19参照）技術面の検討はこれで終り最終譜（167～235）解説「半目に泣く」は専ら心境を吐露し、数有る勝負碁の中でこの碁は悪い思い出に残るNo.1と言っても可いぐらいものだと言ふ。実戦に能く出る白166の様な尖^{コスミ}に出食わず度にチラとこの碁を思い出してしま^{しま}うほどだと言ふので、第6局で奪還未遂に終った今期の蹉^さ跌^{てつ}の決定的な瞬間の残像の負の影響が大き過ぎる。1日目打掛の夜、これまで形勢を楽観していた坂田栄男は布団の中で盤面を思い浮かべている内に非勢を悟ったが、愕然とした彼と対照的に翌朝の挑戦者は楽観気分で上機嫌であった。「天下分け

図 18 第 16 期本因坊戦挑戦手合七番勝負第 2 局，
本因坊秀格九段(先番 4 目半込出し)vs. 坂田栄男
九段，第 167～180 手，271 手完，白 1 目半勝ち



『現代囲碁大系』第 19 巻『高川格 下』148 頁の
第 7 譜に拠り作成。

図 19 第 18 期本因坊戦挑戦手合七番勝負第 5 局，
本因坊秀格九段(先番 4 目半込出し)vs. 坂田栄
男九段，第 163～166 手，235 手完，白半目勝ち

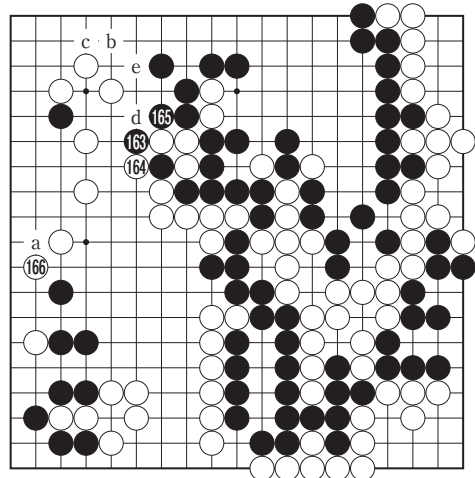


図 18 文献第 178 の第 7 譜に拠り作成。

目の一局だというのに、わずかなりとはいえ気がゆるむとは甘かった。」「この碁を負けるよう
では、勝利の女神も私を見放した。」

『秀格烏鷺うろばなし』第 5 章「苦闘」第 10 節「碁と宗教」にも勝負に絡む神の話が有り、
元来無宗教の彼は曾て八百長で勝ちを譲った藤村芳勝の引き合いで神霊教の教祖に会い、勝負
の世界で 1 度神様の力を試したいと言うその男から本因坊防衛への加護を約束された。木谷實
を退けての初防衛後 5 連覇を引き受けた教祖に每期終了後に金一封持参で御礼に伺い、5 年目
に御霊塩を頂戴して指示通り第何局目の前にそっと布巾に付けて碁盤を清めたが、**天下の実力
制本因坊の神頼みの挙動も教祖の請負の霊験も棋戦の季節らしい怪談に近い。**不審がった相手
の島村利博八段（後に俊宏・俊広・俊廣，1912～91，60 年九段）も宗教に凝り，毎朝お経を
読む木谷等を含めて昭和の棋士には神を信じる人が少なくない。第 1 期棋聖戦決勝（1976.12.2
～77.2.8）で 1-4 で敗れた橋本宇太郎は棋聖就任式の席上，「藤沢さんおめでとう。老人の私
に比べて藤沢さんは打ち盛り，七番勝負の前には四連敗を覚悟していました。しかし，第二局
に勝って対戦成績が一勝一敗のタイになったとき，心のスミで，ひょっとすると“棋聖”にな
れるのではないか，という気がしたんです。そして，棋聖になれたら，これを機に引退しよう
か，などという思いも頭に浮かびました。が，三局目がいけません。おそらく，こんな不遜な
考えが，神の怒りを買ったのでしょうか。今度の敗北は，死ぬまで碁を打て，という神の啓示と
考え，これからも切磋琢磨してゆきたい」と述べた。藤沢秀行は『碁打ち一代』第 17（終）

章で感銘を込めて祝辞のこの部分を引いているが、彼は『野垂れ死に』（新潮社、2005）第4章「芸——無悟の悟」第1節「『無悟』と不惑」の中で、「弟分」と呼ぶ将棋棋士芹沢博文（1936～87、83年九段）との意識調査を紹介している。2人は「囲碁・将棋の全てを100としたら、自分たちはその内どのぐらいを分っているか」を紙に書いて見せ合った。秀行は酔って気が大きくなり多めに「6」と書き芹沢は「4か5」と書いたが、秀行は芹沢が分らないという事がちゃんと分っていると認め出来る奴だったと回顧している。中国では秀行の言は「囲碁有百、我知其七」（囲碁は百有れば、我は其の7が分る）と訳され、人工智能が棋士に勝った後の人智の限界に対する再認識の中で社会的に知れ渡っている。小西泰三は「藤沢秀行 人間と碁」で「盤上に対し敬虔たれ」という囲碁に関する信条を記し、「神の眼より見れば我が芸は児戯に等しい、の戒」と説明したが、勝利の女神は謙虚な敬神精神の強い求道者に微笑む事が多いかも知れない。

盤上波乱の悲喜劇を生み出す激情・闘魂と理智

空前の賑わいを見る昭和碁界の全貌を留めんと企画されたこの大系に118人の棋士が登場するが、100年、200年の後に昭和の棋士として囲碁青史に名を留める者果して幾人か、或いは居るのか居ないのかも考えてみる必要か有ろう、と中山典之は『現代囲碁大系・梶原武雄』の巻末論考の冒頭で棋士・棋史の在り方に就いて問い掛ける。続いて、自分は今こうして囲碁著述家の真似事をしているが日本棋院の棋士でもあり、数多くの棋士と協同作業で棋書を作ったり、対局の現場に居たり、極稀には有名棋士と対局したりした経験も有り、身を以て棋士諸公の人となりや本音に触れる機会が多いから、一般囲碁著述家諸氏に比べると著述稼業の上で多少は有利かも知れないと述べ、今此処に棋士梶原武雄を論じるに当り、冗長に渉るかも知れないが、先ず彼と同時代に生きた棋士たちの梶原評を最初に取り上げてみたい、と予告する。中山は『昭和囲碁風雲録』の「高川秀格の時代」の章・節の中で、「棋士を語る時、棋士に如くことはあるまい」という持論を説いている。「ことに、高川秀格氏は相手を客観的に観察することにかけては第一人者。形勢判断の名手であり、評論家でもある」とした上で、第12期本因坊戦七番勝負（1957.6.28～8.27）に即した高川の藤沢朋斎評を引いている。「朋斎さんは秀哉名人に師事しているので、“碁は最強の手を選ぶべきだ”という、名人の考え方に影響を受けていたのかも知れない。だいたい、次の着手を考える場合、二つの行き方がある。一つはもっとも強い手から考える。できれば、その場その場の最強手を打ちたいタイプ。木谷さん、梶原さん、加藤正夫さんなど、このタイプに入る。朋斎さんもちろん。も一つは常識的な、おだやかな手から入り、最強手を至上命令とはしないタイプ。林海峰さんや石田芳夫さん、私など。前者の弱点は最強手を求めるあまり、しばしば限界をオーバーすること。最強手と最善

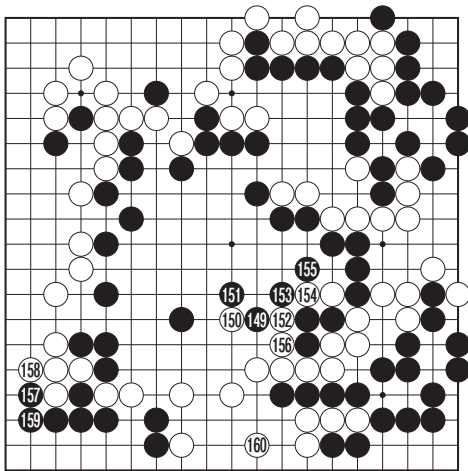
手はかならずしも一致しない。後者の弱点は相場を重んずるあまり微温的になること。そのへんの兼ね合いがむずかしい。」

中山典之は「孤高のひとり旅」で加藤正夫選の序盤・中盤・終盤の高手代表を紹介した後、「ここにも梶原の名前が出てくる。/ここにおいて小生は知るのであった。梶原九段は（中略）強烈な梶原イズムによる布石感覚を後世に残した」と綴るが、高川秀格の例示でも**秀哉・藤沢朋斎**師弟、**木谷實・劔正**師弟と並称された梶原の最強手追求の志向は、高川及び加藤が終盤の**最高峰の最有力候補に挙げた林海峰・石田芳夫の穏健派と対蹠に在る**。加藤が中盤最強と位置付けた強豪は『現代囲碁大系・坂田栄男 上』第22局（第16期本因坊挑戦手合七番勝負第5局，1961.6.16～17，[先番]対本因坊秀格，251手完，黒半目勝ち）の解説「悲願十年の局」で，自ら4-1でその最上位君臨10年連続の夢を断った「昭和囲碁史を彩る名棋士」を，「碁は戦いである」の定説のうえに，「碁は計算でもある」の概念を植えつけた先駆者」と讃え，弱い弱いと言われ続けて9連覇を果たした高川の強さは一般常識の影に在ると見ている。第23局（第9期王座戦決勝三番勝負第3局，1961.10.25～26，[先番]対高川格，黒中押し勝ち）の解説「七冠王達成」の最終譜（141～155）「8大石死す」に，珍しく凌ぎに回った高川の不慣れの故かも知れぬ不出来は平素の棋風ではなく，常に^{バランス}均衡を保ち，妙手も打たないが悪手も無い80点平均打法と言われるのが高川の碁だ，と有る。7つの選手権戦の感想として「いい好敵手を持ち，私は幸せであった」，「当代一流の強豪と黑白を争う。棋士冥利につきる」と言うが，重複表現で有り難さを強調した「いい好敵手」は良き理解者の中でも最高の部類に入ろう。高川の朋斎評も坂田の高川評も**頂上争奪の実体験と勝者の超越性に説得力と権威が有り，棋士を語る高川の本領は冷静な観察・的確な判断・秀逸な表現の他に抜群の棋力にも帰し得る**。

第12期本因坊戦決勝の6局中『現代囲碁大系・高川格 下』（1983）では第2局（7.9～10）が採録され，「難敵を制す」と題した解説は「朋斎さんは以前は堅実な碁を打ち，とくに黒番が堅塁を誇ったものである。しかし戦後，碁風が変ってきた。地に辛く，それでいていっぱい戦うきびしい碁になってきた。そういう碁は，私のもっとも苦手とするタイプである」と語る。白番で1目半勝ちした本局の最終譜（181～300）解説「9乱戦シリーズ」でも^{こぼ}零した様に，自分の碁は終始ゆっくりした^{ペース}歩調で打ち，寄せて勝ちに持ち込むのを目標としているから，常に最強手を繰り出して来る相手と戦わざるを得なくなり，実に草臥れて「ヘトヘトのV6」と為った。藤沢は呉清源との第2次打込十番碁（1952.10.9～53.3.13）が残念無念の1勝5敗で終り，一段差の先相先から二段差の定先まで打ち込まれた責任を取って日本棋院を脱退したが，主催紙『毎日新聞』の尽力で無所属として本因坊戦に参加し今期は木谷實との同星決戦を制した。『昭和囲碁風雲録』に拠ると異色の彼の初挑戦に報道機関は湧き囲碁愛好者も騒然としたが，「孤影悄然と日本棋院を辞した強豪が，野に在って一剣を磨くこと四年。また天下を狙って現れたとでも言う感じなのか。」初戦の対局場には定刻の遥か前から新聞社の

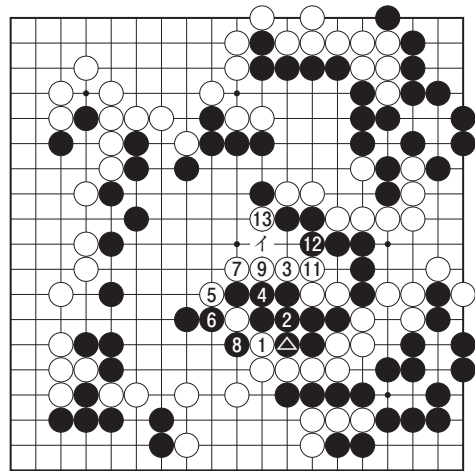
写真撮影担当者や報道映画の取材班でゴった返していたが、呉の戦後復帰戦（対橋本宇太郎第1次打込十番碁第1局，1946.8.26）と同じく、名棋士の大勝負が報道映画で脚光を浴びるほど昭和の囲碁は黄金期の輝きが眩しい。『現代囲碁大系』第21巻『藤沢朋斎 下』（靑島道雄執筆，1983）所収の今期の2局の中で、第1局は黒の薄さを咎める白150の鬼手で悪い碁が逆転し244手完・白4目半勝ちを収めた（図20中の白150に対して黒155では図21の▲とボン抜きしたいのだが、白1以下10まで団子に締め付けられ、白13の切りまで黒7子が助からない、白5に黒イでは白6と粘がれて中央が破れてしまう、と言う）が、第4局（8.2～3）は解説「藤沢流の一番」の通り負けはしたが藤沢流が強くて出ているので収録した。

図20 第12期本因坊戦挑戦手合七番勝負第1局，本因坊秀格八段（先番4日半打出し）vs. 藤沢朋斎九段，第149～160手，244手完，白4目半勝ち



『現代囲碁大系』第21巻『藤沢朋斎 下』48頁の第6譜に拠り作成。

図21 図20の黒155で▲とボン抜きする場合の想定図



▲粘（8の上）
出処＝図20 文献の同じ頁の図20。

『現代囲碁大系』第19巻『高川格 下』（1983）の巻末論考「高川格 本因坊九連覇の足跡」の「6 第十二期 対藤沢朋斎戦」の記述は、「逆転シリーズ」と呼ばれた、波乱の七番勝負だった。/ 藤沢は名だたる力戦家であり、相手の模様に殴り込みをかけるところは木谷と似ているところがある。いずれにせよ仕掛けが強引で、高川ペースは通じない。心ならずも乱戦を受けて立たざるをえなくなるのだ。それに加え、藤沢の白番はマネ碁である。マネ碁の行く先は、やはり荒っぽい。/ 逆転の最たるものは第四局で、序盤、白の高川の石があえなく討死してしまったのだが、これがひっくり返るのである。高川いわく、/ “藤沢さんは自分もミスをする代りに、相手にもミスを誘う不思議な碁だ”と為る。近年の国際碁界では韓国・中国の強硬・力戦志

向の主流化や持ち時間の短縮化に由って、劈頭から盤上波乱（「波瀾 / 波乱万丈」に擬えた語）^{なぞら}が起り紛糾の絶えない展開が多く、互いに間違いが出て（中国流＝「錯進錯出」）形勢の二転三転や苦闘の七転八倒を繰り返し、最後に起死回生のどんでん返しや劇的な僅差決着で幕を閉じる様な悲喜劇が珍しくないが、現代碁の形成期の正統・常識派の秀格と異端・個性派の朋斎の熱戦には当代碁の雰囲気も漂う。一連の熱戦と同時期の夏に米国のダートマス大学で専門家の人工知能研究会が開催され、其処で概念が打ち出された「人工知能」^{A I}（artificial intelligence）は60年後に棋史を変えた。冷静な計算が得意な「賢明派」始祖と激越な強打を身上とする「懸命派」巨頭の決闘は、囲碁人工知能高手と一流棋士の対戦の有り形と似た処も有る両者の自己分析が示唆に富む。棋史は1人1人（又は人工知能の1機1機）の棋士の事績・1局1局の棋戦の物語の総和で、中でも名家（又は名機）の名勝負は熟知玩味（「熟読玩味」に因んだ造語）の価値が高い。大竹英雄の「高川＋藤沢（秀行）」合成の提言は「超・超一流」産出の浪漫^{ロマン}とも思えるが、水火^{うつつもの}器^きを一つにせぬ感じが更に強い「高川＋藤沢（朋斎）」の組み合わせも不可能ではない。評判が悪く勝率も低い真似碁への固執に見る朋斎の愚直・偏狂は高川と正反対であるが、今期^{シリーズ}の高川の積極的な乱戦と驚異的な頑強は好敵手と通じ合う激情・闘魂の所産と言え、棋士・棋戦・棋史乃至囲碁自体はこの様に相克相生に満ちたものだから興味が尽きない。

「愚形の妙手」「陰の陽転・陽の陰転」の変異

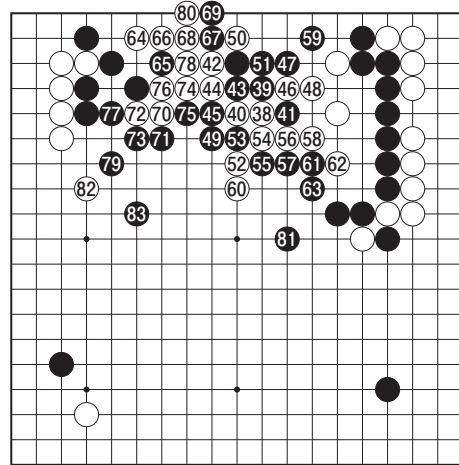
藤沢朋斎は1勝2敗で迎えた第4局では本因坊の序盤の珍しい急戦調の仕掛けに対して、その非得意技（造語）の打ち過ぎと不備を鋭く捉えて序盤早々に白の大石を痛快に丸呑みし、2時間19分の大長考を経て1日目の封じ手65を打つ時には圧倒的な優勢に立っていたが、2日目に悪い癖が出て必勝の形勢にも関わらず引き上げず紛糾を求める相手に付き合わされ、調子^{リズム}を崩した末に信じられぬ大逆転を喫し九分九厘まで勝ちと決まった碁を逃して^{しま}了った。この敗者の弁に対して辛うじて命拾いした勝者は先ず「第四局がまたひどい碁だった」とし、「立ち上がり白の大石を取られてしまった。俗手のグズミ切りをうっかりしたのである。味がほとんどなく取られ」と嘆く。朋斎の第2譜（27～48）解説「急戦に入る」にも、「高川さんは白42をさばきの形として、よく読まずに打ったのが失敗という。黒45と切られて悪いのなら、42で軽くろとケイマするのだった、と感想を述べている」と有る。（図22参照、文中のろは譜の白74）本因坊が迂闊に見落した朋斎の切断の手段は『広辞苑』第6版（2008）の「ぐ－ずみ【愚集み】」で、「囲碁の手の一つ。既存の石との関係が悪く愚形の見本とされるが、時に妙手となる」と説明され、第7版で「（普通、片仮名で書く）囲碁で、愚形とされる空き三角の形にあえて石を打つ手。時に妙手となる。この手を打つことを“グズむ”という」に改訂されている。

国内の最大規模を誇り囲碁用語も多く採録された『日本国語大辞典』では立項されておらず、代りに同音の【具墨】（＝「『名』 合わせ絵の具の一つ。胡粉〔ごふん〕に墨をまぜた青黒い色」）が有る。「あき－さんかく【空三角】」（＝「『名』 囲碁で、盤上で一つのますをつくる四点のうち、三つを同じ石が占めて残る一つに石がない形をいう。通常、能率の悪い打ち方とされる」）や、同じく『広辞苑』に無い「けいま－つぎ【桂馬粘】」（＝「『名』 囲碁で、断点のある自分の石から小桂馬または大桂馬の点に打って、連絡を補強すること」）等も収めてあるだけに、用語の常用度と辞書の収録量の両面に於いて**不可解な欠落と倒錯**の様に思えてならない。

当て字の解説や初期用例から発想や出現年

代を把握する事が出来ないのは残念であるが、「愚集」の字面は愚形の集合・集成・集中的な典型と解せば中国語の「団」より妙味が有る。『広辞苑』の【愚集み】の語釈に有る「愚形」は同書にも『日本国語大辞典』にも項が無いが、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』では「働きのない形。愚形には“集三、集四、集六”という本因坊家伝のことばがある。また“アキサンカク”、“陣笠”（ジンガサ），“梅鉢”（ウメバチ）などが愚形の代表であるが。それらについてはそれぞれの項を参照」と解釈されている。愚形群の中の「集三」（空き三角）を作る愚図見^{グズミ}（愚の図形の見本を表す創作当て字）と共に、本家の当該用語「団」を字面に含む「団子」も愚形・凝り形に算える。この専門的な語意は『広辞苑』の当該項目の両義には入っていないが、『日本国語大辞典』では【団子】の「⑤ 囲碁で、一方の石が一か所に凝集させられて、働きのない形。絞られた場合などによくできるまずい形」と出ている。固まり過ぎた凝集を愚と見るのは石の効率を追求する近・現代の碁の理念に則^{のつと}っているが、愚図見^{グズミ}は接触戦で敵の駄目^{ダメ}を詰める（中国語＝「緊気」）等の効用で強手・妙手に為り得る。日本にも伝来した中国の陰陽哲学の「陰極まれば陽転し、陽極まれば陰転す」の転変原理や、日本語にも入った漢籍の「智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千慮に必ず一得有り」の成句、蘇軾の「大智は愚の若^{ごと}し」や道教の祖老子（李耳、春秋・戦国時代の思想家、生歿年不詳）の「大巧は拙なるが若し」の逆説に因んで言えば、愚形の極みから極稀に鬼手が生れるとしても自然の摂理や囲碁の哲理に適うかも知れない。高川秀格は「捌きは付けから」の格言に従い能く読まずに白 42 と打った事を悔

図 22 第 12 期本因坊挑戦手合七番勝負第 4 局、本因坊秀格 vs. 藤沢朋斎（先番 4 目半込出し）、第 38～83 手、200 手完、白中押し勝ち



『現代囲碁大系』第 21 巻『藤沢朋斎 下』55～59 頁の第 2～6 譜に拠り作成。

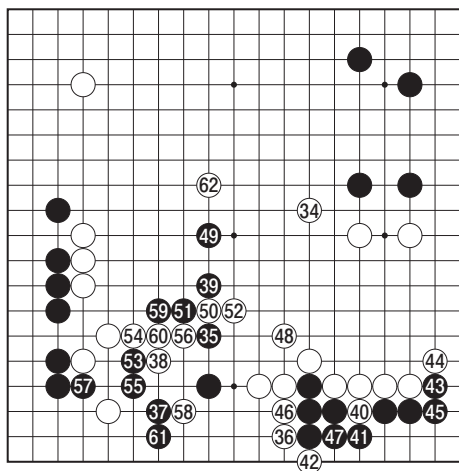
んでいるが、千慮の一失にも及ばぬ「浅慮の必失」（造語）や不慮の過失は思索の不備に由る時が多い。

「乱戦の雄」細川千仞（1899～1974、58年八段、71年引退九段）に「碁は断にあり」と断言し、彼に碁を学んだ文芸評論家白川正芳（1937～ ）の同題著書（三一書房、1985）に由って宣揚されたが、中国の碁諺「棋從（“逢”にも作る）断処生」（碁は断の処から機が生れる）も同じ主張である。命脈確保の為の分断防止の大切さを承知しつつも愚集み切りの手に気付かなかった不覚は、不細工な愚形を用いての愚直な強襲が専門家の洗練された感覚の盲点に在った故であろう。『日本国語大辞典』に於ける「愚集み」の不採録は愚形に対する拒否反応とは関係が無いが、『広辞苑』の語釈が示唆する様に敢えて打つのは勇気が要る事で忌避するのが普通である。高川秀格は『秀格烏鷲うろばなし』を結ぶ終章「最後の花」第6節「碁界の前途」の終りに、生涯一番嬉しい事と言えやはり昭和27年（1952）第7期本因坊戦に勝った事だとし、「わが人生に一応は満足しているが、心残りとは聞かれば、やはり子供時分のことになる。中学時代の数年間、進路に逡巡し、碁と勉強と二股道をかけた。あのとき早く道を決め、ひたむきに碁に進んでいれば、私の碁ももっと芸域が広がっていたはずだ。いちばん大事な時期に、本格的な修業をやっていない。野性的な直感力に乏しいのが私の碁の弱点であるが、それは子供のころ培われるもので、その時期がすっぽり抜けているのが、残念といえば残念である。/しかしもう一度人生のやり直しがきけば、と思うほどではない。/（完）」と書いている。人生に凡そ満足し心残りは行き直しを望むまでもないとする大所高所からの全局的な判断は、最善を求めなくても次善の積み重ねで間に合うという「賢明流」の明るい割り切り方らしい。碁力伸張の黄金期に於ける逸機の損失と野性的な直感力の不足に関する自己分析は、自分を客観的に観察する事に掛けても第一人者と言える棋士評論家の洞察力を感じさせる。藤沢朋斎の愚集み切りが想定外だった事も野性的な直感力の差の現れかも知れないが、大竹英雄が芸域拡張の例に挙げた「高川+藤沢（秀行）」もこの鍵詞で考えると面白い。

藤沢秀行の棋聖戦6連覇は呉清源の打込十番碁の無敵連勝、高川秀格の本因坊9連覇、坂田栄男の本因坊7連覇及び初代実力制本因坊・名人就任に次ぐ昭和囲碁史の金字塔と言える。『現代囲碁大系・藤沢秀行 下』の「棋聖五連覇、名誉棋聖に」と題した最終（第25）局（第5期棋聖戦挑戦手合七番勝負第4局、1981.2.18～19、[先番]対大竹英雄、201手完、黒中押し勝ち）に、「二年後にもう一度挑戦したい。そのときの碁を見て下さい」という敗戦の弁が出ている。来年の捲土重来を諦めた様な言い回しは打撃の深刻さや落胆の大きさを窺わせ、第24局（同期第3局、2.4～5）の最終譜（153～200）解説「11 決め手」に有る裏付けは、「200手をもって投了。全力投球のこの碁に完敗して大竹の闘志はぶつんと切れたようだった」と言う。「天下を唸らせた一局」（解説の総題）は「秀行流厚みの名局」の声価を欲しい儘にし、厚味作戦の名手のお株を奪う気合・手段は大竹に結果・内容の両面で敗北感を味わわせた。第3・308（894）

4・5 譜（25～35, 36～50, 51～62）の解説「天王山」「割込み一閃」「切断」に曰く、天王山の白 34 と必然的な黒 35 の交換で「黒の楽な布石」と言うのが一般の声であったが、そんなに攻められるとも思えない黒に対して白は右下で遮断・封鎖の準備を施した上、「貯えた力を一閃、白 50 の割込みである。この手には控え室一同目をみはった。」露骨な切断を軽視した大竹は白 56 と生で切られ黒 61 の屈伏後も白 62 の追撃を受けた（図 23 参照）が、一進一退の攻防が黒 131 の抑え込みで勝負処に差し掛ると愚集み切りの好手が放たれた。第 10 譜（132～152）解説「ダメを走らす」に拠ると、白 132・134 を経て 136・138 と味好く 1 目囓んで黒 139・143 と駄目を走らせ、白 144 の利かしに次ぐ 146 は隅に手は付かないと読み切った勝利確信の一着と言って可い。（図 24 参照）『藤沢秀行 上』巻末論考の第 1 節「生い立ち」に父親の影響が記してあり、64 歳で秀行を儲けた実業家・愛棋家の重五郎は体が頑丈で負けん気が強く勝負勘が鋭く、その強い遺伝子で碁界には秀行・孫の朋斎・曾孫（朋斎の甥）の小島高穂（1942～，79 年九段）が血を引いており、3 人はがっしりした体付き、一直で強情、ある種の優しさを持つ性格等の共通点が多いと言うが、24 年前に朋斎が高川秀格の意表を衝いた愚集み切りのこの再演にも一脈相通じる野性がある。

図 23 第 5 期棋聖戦挑戦手合七番勝負第 3 局，藤沢秀行棋聖 vs. 大竹英雄九段（先番 5 目半込出し），第 34～62 手，200 手，白中押し勝ち



『現代囲碁大系』第 27 巻『藤沢秀行 下』263～265 頁の第 3～5 譜に拠り作成。

図 24 図 14 と同局，第 132～146 手

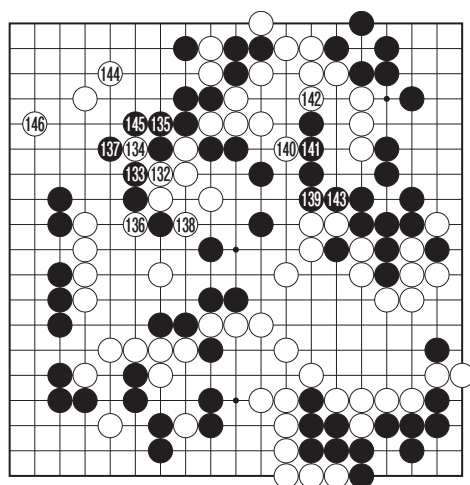


図 23 文献の 270 頁の第 10 譜に拠り作成。

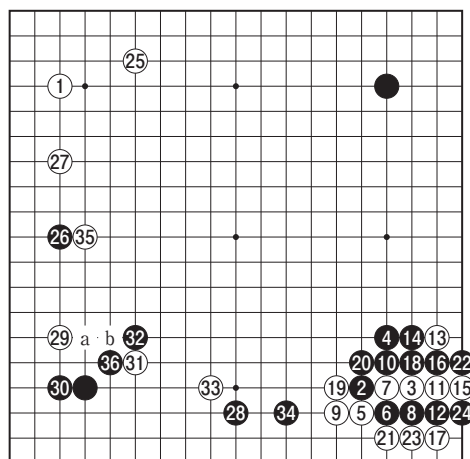
野性的な「異常感覚」と「碁・博打／奕」の相関

藤沢秀行は『勝負と芸——わが囲碁の道』の「怪物にされる」の1節の中で、「名誉棋聖」資格獲得が懸りこれまで以上に張り切った第4回の防衛を振り返って、「結果はあっけなかった。第二局に苦戦したくらいで四連勝のストレート防衛。ボカもほとんどなく、納得のできる手も打てた。会心のシリーズといっている」と満悦を隠せない。「今度こそ秀行さんが危ないぞという声をしり目に、何と、四対ゼロのスコンクで五連覇とは世間も驚いた。天才大竹も、/“先生、強いや”/と一言残して立ち去った。』『昭和囲碁風雲録』の「藤沢秀行、棋聖戦六連覇」に記された敗者の絶句調の驚嘆に対して、勝者が引いた4戦（1981.1.28～2.19）^{スコンク}零敗の大竹英雄の弁は「このときの秀行先生は鬼のように強かった」に続いて、「秀行先生のあらゆる芸を盗み、それをあとに続く者に伝えるのが私の義務と思って、一局で多く打ちたかったのですが、まるっきり歯が立たなかった。強さの秘密は、碁に対して達観されていること。それが集中力になっている。棋聖になってからの勉強量もすごい。技術的には、専門家がみんな欲しがっているすばらしさ——異常感覚、独特の嗅覚を持っていることです」と述べた。秀行は『野垂れ死に』（新潮社、2005）第4章「芸——無悟の悟」第3節「日々は戦」の中で、「二十代のイキのいい頃、私の打ち筋は“異常感覚”と観戦記者に書かれた。明治時代の棋譜から研究し、正統派を自認していた私は不本意だったが、今思えば、確かに奇抜な手を打っている」と語る。『勝負と芸——わが囲碁の道』第5章第2節「秀行流の感覚とは」では先ず「感覚」に就いて、正確な数字が出る寄せや死活・攻め合い以外は全て曖昧でこの範疇で一纏めにするものとし、自分のある時期の所謂「異常感覚」は一般の基準から少しずれていただけだと言う。全七段対初段戦（1942.5.17）の対小野田千代太郎七段（1896～1944、追贈八段）の奇手が例示され、「こんな手はアマチュアのみなさんのほうが打てるのではないだろうか。初段のとき、私が打った思い出の一手である。善悪は別にして、気分は出ている。現在の私だって、黒1に想到するかどうか分からない。㊦の一手を重くさせるのが黒1の狙い。白がAと出てくれば、黒Bとツケコシて思うツボである。白Cとハネれば、もちろん黒Aと切る。はつきり読んだわけではない。成算があったわけでもない。打ちたいように打ったまでである。二十歳にもならぬ若僧にこんな手をやられて、小野田千代太郎先生も弱ったと思う。黒1のようなひらめきは、勉強して簡単に得られるものではない。私に“異常感覚”が備わっていたということか」と書かれている（㊦・黒1・A・B・Cは図25中の31・32・36・a・b）が、妙手を生む秀行の「異常感覚」は正に高川秀格が不足を自認した野性的な直感力であろう。

高尾紳路（1976～，2005年九段）著『秀行百名局』（秋山賢司編集、誠文堂新光社、2009）の第1章「青春躍進の譜」（院生時代～1960年の31局所収）の冒頭に、藤沢秀行の一
310（896）

番弟子は第2局の黒32に特に注目して頂きたいと最大の見所を提示する。譜の解説で「これを見たときは鳥肌が立ちました。なんともすごい一手です」と賛嘆し、意表の強手を喫して白33・35と苦心惨憺したものの黒36と戻って大いに分り易いと説く。引退の記者会見(1998.10.14)で最も思い出に残る1手に挙げられたこの会心の傑作は、正規の棋戦ならぬ『囲碁倶楽部』(『囲碁クラブ』の前身)企画のお好み碁(2子指導碁)に飛び出たものであるが、選手権獲得に繋がる勝着よりも秀行流の原点を為す価値が彼の芸道至上主義者に貴ばれた。前書「至高の芸を味わう」が言う様に晩年こそ何物にも囚われない自由な考え方が盤上に強く表現されているが、16

図25 『囲碁倶楽部』全七段対初段戦、藤沢保初段(2子)vs. 小野田千代太郎七段、第1~36手、154手まで・以下略、黒中押し勝ち



高尾紳路『秀行百名局』12頁の第1譜に拠り作成。

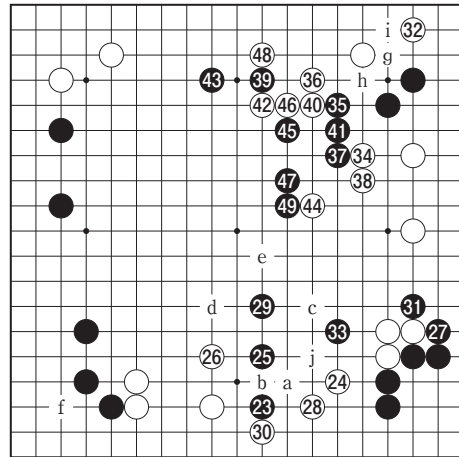
歳時の対局から生涯の1手を選んだ「異常感覚」は王者の低年齢化の国際化時代に合い、今は一般の基準が私に近付いて来たという「秀行流の感覚とは」の言はこの事象にも適用する。不思議な事に『現代囲碁大系・藤沢秀行 上』の自選25局中この一戦は入っておらず、本巻の第1~6局を割愛した『秀行百名局』の最初の3局とも採録していない。両書所収の最初の打碁は五段時代の対藤沢庫之助八段(1949年『棋道』4月号所載)局、手合の場の「黎明会」は庫之助が発起した総互先・込出し制採用の革新的な研究会で、279手完・黒2目半勝ちの「僥倖の一局」(『藤沢秀行 上』解説の総題)は下剋上と為った。『大系』の第2・3譜(18~31, 31~49)解説「千両曲がり」「冷静さを欠いて」には、秀行流の重厚さ・情緒性と込無しの伝統にも由来した庫之助の強引さが表れている。曰く、①白24は庫之助の一杯に張った強手(好点の27と抑えるのが普通)だが、黒27の実利も大きい価値千両の曲がりを許したのに不満が有る。②白28と連絡を妨げ23・25(相場の飛び)の石に襲い掛らんの意気込みだが重い、白a→黒b→白c→黒29→白dの運びが相場で、続いて黒eなら白fと三々を侵す要領で打ちたい。③黒29と軽く中央に進出し、序盤作戦は黒大いに有利、若き秀行の棋理の明るさを顕著に示したが、此处で悪い癖が出て黒31はしつこ過ぎ(白の形の無い処へ絡んで行っても暖簾に腕押し)、今思えば黒g、白h、黒iの早収まりで十分。④24の秀行に冷静さは求める可くも無く、黒31に手抜きされ「カーッと頭に血が昇ったような黒33」、一見急所風のこの手も実は筋が違っていた(jが形)。当然白は又手抜き、右上隅の白32・34の連打を許しては形勢振り出しへ戻る。⑤(庫之助の感想)白42では45の尖が正しく、44では先に48の付けを

打つ可し（黒 45 の覗きを幸便に利かされたのは辛かった）。⑥黒 49 が手厚い好点、一応一段落。（図 26 参照）

解説中の「相場」は『広辞苑』の「④世間一般に定まっている考えや評価。また、大体的見当」の意で、その用例の「博打^{ばくち}は負けるものと一がきまっている」は世間の常識に近い。「ばくち【博打・博奕】」は「(バクウチの約) ①財物を賭け、骰子^{さいし}・花札・トランプなどを用いて勝負をあらそうこと。ばくえき。かりうち。とばく。②一か八か^{いっかぱっか}のまぐれ当りをねらう行為。“大一を打つ”等の多義を持つが、「打」は「う-つ【打つ・討つ・撃つ】」の「一【他五】」⑥《打》転じて、あることを行いう意」の「②碁・将棋・すごろくなどの遊戯を行う。古今雜“碁一・ちける人

のもとに」③「ばくちをする。徒然草“ばくちの負けきわまりに残りなく一・ち入れむとせんに相手は一・つべからず」に跨り、②は「将棋を指す」「双六をする」に対する「碁を打つ」の様に碁に特化する傾向が有り、「えき【奕】」は「囲碁^{いぎ}のこと。雨月二“桃の実の大なるを食ひつつ一的手段を見る”」なので、囲碁と博打/奕との相関が言葉の字・義から感じ取れる。藤沢秀行の父親は曾て静岡県製の糸業の雄と共に生糸相場に手を出した相場師でもあり、勝負師の山っ氣を引き継いだ彼は公営賭博の競輪等に嵌り億単位の借金を注ぎ込んだが、『現代囲碁大系』第 43 卷『趙治勲』（村瀬利行執筆，1983）の最終（第 30）局（第 7 期棋聖戦挑戦手合七番勝負第 7 局，83.3.16～17，対「先番」藤沢棋聖，白 1 目半勝ち）の最終譜（201～268）解説「10 三連敗から四連勝」の表現を借りて言えば、「競輪等で鍛えた勝負度胸が大勝負に生きている」特長も秀行の偉業の秘密の一端に有る。坂田栄男は父が賭け碁を好む事で彼と共通しながら少年時代に親の損を半分取り戻した事が有り、『坂田栄男 上』の巻末論考「坂田栄男 栄光の軌跡」の第 3 節「プロへの道」に拠ると、院生時代にも外部の旦那（金持）と賭け碁を打ち敗者の腹癒せの苦情で棋院から注意された。侍^{さむらい}の氣風が残っていた時代には碁を遊戯^{ゲーム}として楽しむ傾向が出現・定着した戦後と違って、碁は勝負と見られ棋士は「碁打ち」と捉えられ異称「真剣勝負」の賭け碁は流行っていたが、坂田は家の代理戦争や碁会所巡りの熱闘で「道場剣法」ならぬ「喧嘩殺法」を身に付けた。『大系』第 20 卷『大平修三』（頼尊清隆執筆，1983）の巻末論考「大平修三 孤独な戦い」第 2 節「父親の碁のこと」に拠ると、彼

図 26 研究会「黎明会」、藤沢庫之助八段 vs. 藤沢秀行五段（先番 4 目半込出し），第 23～49 手，279 手完，黒中押し勝ち



『現代囲碁大系』第 26 卷『藤沢秀行 上』67・69 頁の第 2・3 譜に拠り作成。

の「丈和の再来」（山部俊郎の評）も少年時代に親の賭け碁の負けを一部取り戻した。終戦翌年に父憲治（1890～1975、62年五段、追贈六段）に大きな賭け碁を吹っ掛けて家・財産を捲き上げたのは、酒井通温（本名保一、1912～97、61年八段、83年引退九段）と中部の双壁を為した棋士である。大平は2年後の二段時の挑戦で6番^{ストレート}棒に勝ち相手に「もう勘弁して欲しい」と頭を下げさせたが、棋士間の家屋の時価を上回る巨額の賭け碁は前代未聞の世紀級の棋界醜聞とも断罪でき、父の仇討ちとして高手に挑む若輩の挽回戦も昭和前半の碁の博打的な野性を端的に現した。

「酒色財氣」と軽重序列に見る中国社会の許容限度

中国で人を駄目にする四悪とされる「酒色財氣」（酒乱・色事・不正蓄財や散財・怒氣）は、昭和囲碁の「巫聖」の美称に値する坂田栄男・藤沢秀行の言動に様々な形で害が現れていた。江崎誠致は『石の鼓動』の中で高川秀格から本因坊を奪った夜と林海峰から名人を取られた夜の坂田の酔狂を記し、敗者への配慮が無く旅館の宿泊客から「本因坊、煩い！」と怒鳴られた狂喜の酩酊は度を超し、古縄の様に泥酔し愚痴を繰り返す付き添いの棋士を「馬鹿！」と叱る醜態も衝撃的である。第20章「友情」に銀座の洋風酒場で「この店の勘定が高い！」と連呼する**野暮な挙動**が有り、親しい作家近藤啓太郎（1920～2002）の^{モデル}原型小説で私生活を暴露された事も触れてある。暫く絶交された近藤は後に『勝負師一代——専門棋士の実態』（ぶっくまん、1976）の中で、「墮ちた神様」（短篇の題）と水商売の女との婚外情事まで文芸誌に載せた事を反省したが、**酒・色よりも棋戦に影響する「氣」の気合過剰や怒氣爆発**の1例は「昇仙峡の戦い」である。七段時代の第6期本因坊戦挑戦手合七番勝負第5局（山梨県甲府市昇仙峡、1951.5.31～6.1）で、本因坊昭宇を3-1の角番に追い詰めていながら**大優勢の中で雅号を考え出して自滅した**。橋本宇太郎は『勝負のこころ』（浪速社、1970）第1章（同題）第1篇「わたしのこの一局」の第2節「憤兵は勝たず」で、初日の打ち掛けに立会人岩本薫が交通事情で12分遅刻し坂田が怒った事も敗因に繋がると指摘する。秀行の「氣」の噴火は秀格の無劫に応じた後の立腹や前出の藤沢庫之助の手抜きへの反撥に見られ、「財」の失敗は競輪等による借金地獄の他に1960年代後期～70年代前期の不動産仲介等の事業の挫折も重なり、「色」の**波瀾**は愛人を4人持ち本家以外の子供を2桁作った様な凄い状況・結果に垣間見え、「酒」の**狂乱**は想像を絶する振舞いや症状を**盤・家・国の内外で呆れるほど多く見せた**。曹薫鉉は『世界最強の囲碁棋士、曹薫鉉の考え方』（戸田郁子訳、マルク、2016〔原著＝15〕）「八段（第8章）人から学べ」の第2節「より多くの人をいだけ」の中で、敬愛なる秀行を世界の碁界でも無二の奇人とし日本人離れた破格の行動を紹介している。例えば、ある時テレビ中継で坂田栄男が大勢の前で大盤解説をしている最中、酔った秀行が突然壇上に上がって指示棒を奪い、碁盤

のある地点を指して「男ならばこのような穴がある場合、当然、ノゾかなきゃならんのです。そして×××ではなくて○○○なら、当然その穴をふさぐのです！」と大声で叫んだ。別の人がこんな失態を演じたら叱責されるはずだが、秀行先生がすると特有の率直さのお蔭で喜劇の様にやり過ぎられるという論評の通り、秀行も坂田も天真爛漫・純粹無垢の故のご愛嬌・欠点にも関らず人人の尊崇が集まっている。

四字熟語の「酒色財氣」は「輕重」の語順の様に危害や罪過の相対的に軽い方から始まり、最も重い方を最後に出すのは重みを強調する判断と落ちを導く起承転結の修辞法に由る。米国映画芸術科学アカデミー賞（1927年創立）は脇役→主役、部門→作品の段取りで発表し、講談・落語等の寄席の「前座見習い→前座→二つ目→真打」も座を盛り上げる次第である。中国の「相声」（漫才）等の公演も高潮への期待を持たせる為に「低→高」の展開を為すが、寄せ乃至全局で価値や重要性が高い方から着手して行く囲碁は興業の流儀と比較すれば、娯楽よりも競技の要素が強い本質や軍事・経済・政治の有形との類似性に改めて気付く。日本の実務の作法として人を紹介する順は身内・目下・低位→部外者・目上・高位と為るが、中国では漢単語の文字順や発想・仕来り等に多い日本式との反転の様に正反対である。尊貴順（造語）優先の中国礼法の様態と要諦は「政治の国」の表徴に即して例示・説明するなら、党大会後の新中央委員会の第1次全体会議（略称「1中全会」）で選出された政治局常務委員の御披露目が好例と為る。『現代漢語辞典』の【党】の「①Ⓐ政党、我が国では特に中国共産党を指す」の通り、1党独裁体制下の「党」は専ら中共を表し翼賛の在野弱小「民主党派」は圏外に置かれる。日本では1955年に自由民主党の結成と左・右社会党の統一に由って保守・革新の2大政党制が出現し、現実には自民党の単独政権が93年の分裂・総選挙での敗北まで続き交代は起らなかったが、中国の「49年（共産党政権樹立）体制」（造語）は1強「独覇」（単独制覇）しか認めない。55から田中角栄（1918～93）の自民党第6代総裁（72.7.5～74.12.4）就任の逸話が連想され、時の将棋名人・十段・永世棋聖中原誠八段（1947～，選手権3期以上に由り73年九段）が、「田・中・角」に引っ掛ける遊び心も有ってか「5五角」と扇子に揮毫して贈った。縦横各9柵の正方形の将棋盤の真ん中の5五を占める角行（飛車と並ぶ大駒）の見立てで、その睥睨四方の威風を礼賛し八面六臂の活躍を期待するという意味合いが読み取れる。第31期名人戦挑戦手合七番勝負（4.7～6.8）第7局で大山康晴を無冠に転落させた彼は、名人9連覇の中原時代の起点に天下君臨の雄心をこの洒落に託す節も有ったかも知れない。縦横各9列の構図は古都北京の皇居紫禁城の正門の門釘（飾り物として城・廟・宮殿等の建物の扉に付ける巨大な釘）の様に神秘的な意味が有り、5列目の交差点は全方位支配の中心と共に1～9の間に当る故に中庸の王道を象徴する。1桁の数字の中で最小の1は出発点に過ぎず最大の9は頂点から反落する恐れが有るので、中国思想の根幹中の根幹を為す『易経』の觀念では中間の5が最も尊いとされている。頭の一番の位置と中央に居る場所が尊ばれる觀念に基づく中共新最

高指導部の初登場は、党首が最初に現れ壇上の真ん中に立ち No.2 以下が追隨して両側の所定個所に就くのである。日本語にも入った「領袖」の由来・意味・用法は『広辞苑』の通り、「えり〔領〕とそでとは目に立つ部分であることから）人のかしらにたつ人。人を率いてその長となる人。おさ。かしら。“政党の一”」であるが、中国語の「領」は「首」^{くび}「要」^{かなめ}「率いる。導く」等の意も有るので「袖」より優位に立つ。多数決形成の必要に由る政治局常委の奇数構成は党首を核心として擁する仕組みでもあり、現行7人の同席順次の「領」中心・「袖」両側の左右対称は富士山の頂と裾の様に映る。企業経営等で上層部が意思決定し下部へ指示する^{トップ・ダウン} top-down に当る「自上而下」（上から下へ）は、表に立つ「領・袖」の中の上の者が先頭・前面に出る中国の絶対的な序列感覚と通じる。

『世界最強の囲碁棋士、曹薰鉉の考え方』で挙げられた藤沢秀行の酒乱の失態には、1980年代に研究会の成員を率いた訪中の際に鄧小平の招宴で^や行らかした事も有り、酒をしこたま飲んで大声で騒ぎ宴会が中断したと言う。「ウィキペディア フリー百科事典」日本語版の「藤沢秀行」の項の「エピソード」欄にも、「酔うと女性器の俗称を連呼する悪癖があった。鄧小平と面会した際、あろうことかペロペロ酔っぱらっており、“中国語でおまんこのことを何というのだ”と執拗に絡み、面会途中で中止となった」と有る。彼の80年代の最高指導者（1904～97）は「牌友」（^{ブリッジ}「橋牌」の遊び仲間）聶衛平の懇願に依て、第3回「中日囲棋擂台賽（勝拔戦）」（日本側の名称＝「日中スーパー囲碁」）で3連勝した（87.6.10～7.19）劉小光を会食に招いた事が有るが、聶も選手団一同の便乗を^{ねだ}強請る勇気が無かったほど影の帝王は気軽に礼遇を与えないので、秀行に私淑・心酔する聶の顔を立てて一席を設けた可能性は否めないとしても確証が無い。例の^{ネット}電脳上^{フリー}の「自由百科事典」の「中原誠」の本文の上に注意書き（2014.10・11）が付き、警告記号△で改善を勧告する問題として出典の不備と大言壮語的な記述が挙げられている。存命人物の記事は特に検証可能性を満たしている必要が有るとの特筆は正論であるが、物故者の場合は当人から異議・訂正を求める機会が無いので同様の慎重さが求められる。「藤沢秀行」には改善の要請が無く出典未記載のその件は事実の様に認められているが、次の「開高健のエッセイ『開口閉口』に出てくる、“門口で‘やい、クロ饅子、でてこい！’と叫ぶ‘疾風怒涛のロマン派’とは藤沢の事である”と照らせば、秀行なら有り得る「放言痴語」（「大言壮語」を振った造語）として不審がられない^{ゆえん}所以か。漢籍由来の「水清ければ魚棲まず」の「清廉過ぎると人に親しまれない」の原義を転じて、余り完璧な記述・出典を求めると検証困難の内容や事実が生きて来ない事に当て嵌めれば、曖昧な情報を清濁併せ呑み咀嚼^{しゃく}・反芻^{すう}の内に別の真実を掴める可能性が思い知らされる。

要人の外賓接見を原則的に公表する中国でその面会の報道が無いのは私的な性質の故かも知れないが、秘話披露欲（造語）の強い国柄にも関わらず関係者の回顧談も見当たらないのは訝られる。田中角栄は首相就任（1972.7.7）後の訪中（9.25～29）の3日目に毛沢東（1893～1976）

と会見する際、主席公邸兼私邸に到着するなり緊張の所為か手洗いの拝借を申し出て毛を廊下に待たせた。毎日新聞社政治部著『安保 迷走する革新』（角川文庫、1987）で報じられたこの逸話は、「為賢者諱」（賢者に気兼ね^がしてその誤りや欠点を隠す）の伝統が根強い中国では「友好人士」への配慮で隠されて来た。無礼（破礼 / 随意）講が存在しない中国で放恣な言動で会見・宴会を中断させたとすれば、「不注意^ボに由る意外^カな失敗」として封印して置くのも善意の穏便な処理と言えよう。曹薫鉉の秀行像に「大変な酒豪で、後輩を愛するように女性も愛し、囲碁を愛するように博打も愛した」と有るが、中国では台湾や昔の韓国（2015 年廃止）の姦通罪こそ無いものの「婚外恋 / 外遇」（不倫）には厳しい故、秀行伝説の中の破天荒な飲酒・借金は流布される半面派手な女性関係は忌避され勝ちである。中国囲碁の中興の祖と言える陳祖徳（1944～2012, 82 年九段 [初代 3 人中序列 2 位]）は、回想録『超越自我——我的黑白世界』（自我を超越して——私の黑白の世界。人民文学出版社、1986）第 9 章「初めての訪日」の中で、73 年の初訪日の際に日本式の宴会で受けた女性接待係の「お流し頂戴」の奉仕^{サービス}に馴染めず、「日本の女性はどう？ 綺麗でしょ」という日本人の度重なる質問に立ち往生したと書いている。碁以外のものに興味は全く無いし幼い時から母親が一番美しいと思って来たからだと言うが、「母への愛慕の気持がもたらした一種の偏見」は「養母」の日本碁界に抱く中国棋士の感情と通じる。酒精・借金依存症は自らこれを克服した美談の材料とし艶聞を切り捨てた秀行の形象^{イメージ}は、中国社会の倫理観・美意識に於ける鷹揚な許容と峻厳な不寛容の暗黙^{けじめ}の区別が感じ取れる。

プロ 專業の模範の「不死身」と囲碁人の「波調」

鄧小平は毛沢東の政争と再建の必要から「文革」中失脚→再起→再失脚を経験させられ、毛の死後「不死身」の本領を発揮し国民的な人気を楯に党内の支持を集めて再び復活した。未だ「文革」末期の事実上の No.3 → 2 に相当する頂上級要職^{トップ}が付与されなかった浮上期に、中央・地方の責任者・関係者が出席する全国規模の農業生産会議の閉会の時、毛が指名した後継者の華国鋒主席（1921～2008, 76～81 在任）が最初に壇上から降りた後、「主席台」（議長席）に居る鄧は李先念（1909～92）と同じく 2 番目での退場を遠慮した。政治局委員・國務院（内閣）副総理の李は序列が上ながら年齢・「資歴」（資格・経歴^{キヤリヤ}）が下で、声望の高い先輩・長年の上位者に対する尊敬を表す為^ベに鄧と互いに謙譲し譲らなかった。暫くして鄧が「原則に由って、君が先に行く当きだ」と厳粛に言い李は氣挫^げそうに従ったが、公定序列（「公定価格 / 相場 / 歩合」）に擬えた造語）不可侵の「政治規矩」は正に鉄則である。鄧は直後の第 11 期 1 中全会で副主席 4 人中の 2 位に当選し順当に 3 位の李の前に進み、後に 1 位の葉劍英（1897～1986, 国防部長 [大臣]・元帥）が支えた華を辞任に追い込み、實質的に党首^{りょうが}を凌駕する党中央軍事委員会主席の王座を華から取って 8 年間据わり続けた。高川格は第 7 期（旧）名人戦（1968）の

挑戦で林海峰を4-1で破り「不死身」と呼ばれたが、『秀格烏驚うろばなし』第6章第10節「互角に戦えている」で述べた人間の回復する力の効き目は、その本因坊9連覇・53歳時の名人就位の偉業と鄧の76歳以降の君臨の覇業に見られた。

『現代囲碁大系・高川格 下』第25局（第7期名人戦挑戦手合七番勝負第4局，1968.9.19～20，対〔先番〕林海峰名人，白持碁勝ち）の解説に曰く，1勝1敗で迎えた第3局からはこれまでの割りと和やかな雰囲気が一変し，互いに気合が掛って来た第3局は根比べの碁に為って疲労困憊し終局は午前1時を回っていた。「林さんの二枚腰は有名であり，だいたい小競り合いがつづいたあと寄せの碁になるわけだから，我慢くらべ，根気くらべでスタミナを消耗すること甚だしい。」最終譜（201～251）解説「10 ねばり勝ち」の通り第3・4局とも林のお株を奪って粘り勝ちした，「この碁，終局したときも林さんは盤面七目勝ちと思っていたらしい。実際は五目で，コミを差し引いて持碁。持碁は白勝ちの規定で，ふつうのコミ碁の半目勝ちとおなじである」，「感想が終わって私が退席したあと，林さんは“二十目も勝ってなきゃ，勝てるような気がしない”という捨てゼリフを吐いたとか。確かに今から思い出しても，信じられないほどの私のねばりであった」。「念願の名人位に」（解説の総題）は同じ調子で1目勝ちした第5局（10.3～4）の事であるが，終盤力最強級の林を1分碁（9時間58分消費）に追い込み最後の目算違いを誘った結果は，棋史に残った敗者の名捨て科白が示す様に「三枚腰」新名人の特筆すべき快挙と言える。林は抜群の「粘（り）勝（つ）力」（造語）・終盤力・自制力を武器に碁界の頂点を極めたが，当時齡が2倍と為る高川の一枚上の強靱さ・精度・平常心は流石に「賢明流」元祖である。

陳祖徳は『自我を超越して』第20（最終）章「再び世界を獲得する」の中で，重病の故に最後の出場と為った全国囲碁選手権戦（第13回，1980）の最中に血便が続く時，5年前に訪中団を率いた高川秀格が南京の対局で見せた頑強な精神が目に見えて来る，と可也の紙幅を割いて記述している。対聶衛平の1局目（10.28）を落した後に風邪で高熱を出したが病体を押して再戦を続行し，厚いセーターを着込み長い襟巻を巻く姿で額に玉の様な汗を滲ませ，疲労と精神的な緊張から石を握る手も震えていたが，少しも揺るがせにせず1手1手を打ち進め遂に中国の新王者から1勝を上げた。現代の日本・中国の棋士は殆ど囲碁人（愛棋家や棋士）の父親の影響で碁を覚えたのであり，棋史は長期に亘る無数の専業・非専業者の「彼の物語」の複製・再生産とも言えようが，昨今の中国の囲碁人は身近な父親の背中と共に海の向うの「養母」の背中を見て育つもので，1代（1964～74）の王者が高川秀格を礼賛した事も囲碁王国の名家の高風・品格を手本としている。この自伝は権威有る人民文学賞の第2回（1994，86年以來の文学作品が対象）で受賞し，出版直後の中央人民廣播電台（国営無線放送局）の連続放送で広く伝播され全国規模の反響を呼んだ。中国の数少ない囲碁文学の中で知名度がこの立志（中国語＝「勵志」）伝の右に出る物が無く，遺書の心算で綴った史実には自ずと対外棋戦

が多く中日交流及び昭和の碁の伝承にも為る。

『現代囲碁大系・高川格 下』第26（最終）局（第8期名人戦挑戦手合七番勝負第3局，1969.9.9～10，対「先番」林海峰，白8目勝ち）の解説「名人位を明け渡す」に拠ると，名人に成った時^{ジャーナリスト}報道人に対して，「この年に二期も三期も名人位を続けようなどと，大それたことは考えない。この一年間，床の間を背にして打たせてもらえるだけでもしあわせです」と語った。最終譜（173～250）解説「9リードしたが」では2-1で優位に立った第4局に就いて，「前日，林さんは風邪で高熱を出したらしいが，碁の方は私が逆転負けを食ってしまった」と言う。「第四局の打掛けの夜，こんどは私が風邪にやられた。私の風邪は毎度タチがわるく，一度ひいたらなかなかおさまらない。/第五局は完敗し，第六局はいい碁だったが林さんのねばりに屈した。かくして公約通り（？），一年で名人位を明け渡すことになった。/風邪という災難を別としても，このシリーズの疲労は大きかった。本因坊戦連覇時代も毎回疲れたが，碁には全力投球することができた。ところがこの名人戦では疲労のくるのが早く，力を振り絞ることができないのである。これは明らかに年齢からくるものであろう。」名人位を失い50代を半ば過ぎた頃から愈々力の限界を感じて来，振り返れば昭和43年の名人就位が現役としての最後の栄光であった，という結びの感慨は翌年に体力の衰えで引退し2年後に逝った彼の一抹の哀愁を漂わせる。「念願の名人位に」の第1譜（1～16）解説「黒，両締まり」に，「名人戦で林さんに勝てるとは思っていなかったが，少なくとも碁風に関しては，苦手のタイプではない。寄せ勝負をめざす碁であり，私と波調^{（ママ）}は合う」と有るが，「波長」の誤植である「波調」は奇妙にも棋士に影響の大きい年波・体調・調子を字面に含み，林・高川が伝染するかの様に相継いで風邪を患った偶然も「波調」の合致と見れば興味深い。和製漢語の「波長」は『広辞苑』で，「①〔理〕（wave length）波動のすぐ隣り合った山と山と，または谷と谷との間のように，位相を等しくする二点間の距離。→波形。②（1が合わないと電波交信ができないことから）話をする際の互いの心の動き」の両義と為り，②に用例の「彼とは一が合わない」と有る。別称「手談」の囲碁は会話しても出来るから「波長」も厳密に言えば適用し難いが，相性の良い両者の体調・調子の波動に即して「波調」を新語として棋士・棋戦を見詰めよう。

武宮正樹は『盤上に夢と元気を——宇宙流が到達した囲碁観』第3章第1節「プロの条件は“センス”」の冒頭で，以前愛好家から^{アマ}専業と^{プロ}非専業の最大の違いは何かという本質を衝いた鋭い質問を受け，暫く考えて「センス」と答え以後この漠然とした見解の精緻化を追求して来たと記している。1977・97年に王座・天元位を獲得した「中晩年の星」工藤紀夫（1940～，76年九段）も，『現代囲碁大系』第32巻『工藤紀夫 高木祥一』（勝本哲州執筆，1982）の「序」の冒頭で，非専業と専業との差は^{アマ}何処に在るかという囲碁愛好家から^{プロ}可く受ける質問に答えている。「強弱の差は別として，アマの碁の特徴は強いところは大変に強い，けれども弱点がある。例えば序盤，中盤，終盤と分けて，序盤中盤は強いけれども終盤が弱いとか，攻めると強いが

攻められると弱いとか、戦争は強いが形勢判断にうといとか、更には、強い日にはとても強いが、弱い日はダメ、と日によって好、不調の波が激しい。まあこれは仕方のないことで、仕事の上で重い負担や悩みを抱えていたり、仕事で疲れている時は不調なのはやむをえないでしょう。/プロの碁の特徴はその裏返しで、あらゆる部分に実力相当の平均した力を、常に同じ状態で発揮することです。」武宮は11歳時に田中三七一五段（1904～92, 74年六段, 84年引退七段）に師事し、専門試験合格後「私が生みの親、木谷さんが育ての親」として第2の師匠に推薦された。工藤は10歳時に非専門強豪の囲碁著述家勝本哲州に入門し、2年後に中学に通う傍ら院生・前田陳爾七段（1907～75, 56年八段, 63年九段）の弟子と為った。生・育の両「親」がもたらした重層性は「生母・養母」に育まれた中国棋士の強みでもあるが、工藤と最初の師の専門+非専門の複眼的な視座に基づく上記の論断は実感が籠っている。其処で強調された好調・不調の波の「波調」又は「調波」（造語を振った造語、調子の波）は、一流棋士にも快調や変調・乱調の波が間々有るから囲碁人の逃れない自然法則と言える。大竹英雄が唱えた棋風複合の例の「高川（秀格）+藤沢（秀行）」はこの文脈で吟味すれば、均衡的な実力を安定的に出す型と棋戦を選別し全力投球の局でも斑が出る型の相反が見える。好調・不調の波動に影響されず平均点打法で淡淡と肅肅と赫赫たる偉業を成し遂げた高川は、得意・失意の浮沈に関らず破局を回避し絶頂に登れた鄧小平と同じく専門の模範に値する。

夏 剛（立命館大学国際関係学部教授）

夏 冰（京都囲碁道場師範）

相克相生与深奥幽玄——围棋、棋史之情理及妙趣（2）

本文是前作《围棋之“酷”与人智之“魔”——顶级智力竞技的原理及中、韩、日、人工智能4强的特质、走向（1~3）》（本刊第29卷1~3号）、《相克相生与荣枯盛衰——国际化、人工智能称雄时代中国围棋的演变及恒常（1）》（本刊第30卷2号）的升级版（因而有部分内容、见解、表述活用了前作并予以展开）。

本部分首先着眼于围棋史上两大黄金期（日本江户、昭和时代）及新纪元（人工智能时代），从探讨起源的通说、异说入手，比较“生母”中国和“养母”日本的思维、棋风等的差异（如日本围棋的美形、厚实、稳健、淡泊对中国围棋的奔放、豪迈、过激、贪欲），及棋战中的文化、国民性的差异、冲突。指出20世纪后半主流由“拼命”转向“平明”并迎来国际化时代，关注不同棋风融合的课题。

将棋手故事视为棋史的基轴，寻求高手的事关围棋观、人生观的信念、气势，展示围棋王国青、壮、老代表的争霸欲望和大家风范。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

（夏 冰，京都围棋道场教师）